

768.42

To622Tg

II

義太夫の花豊竹呂昇



073865-000-1

768.42-To622Tg

義太夫の花豊竹呂昇

長博景/編

M39

CEI-0576





豐竹呂昇



夫太佐士本竹



夫太呂竹豊



昇居の時して出に阪大

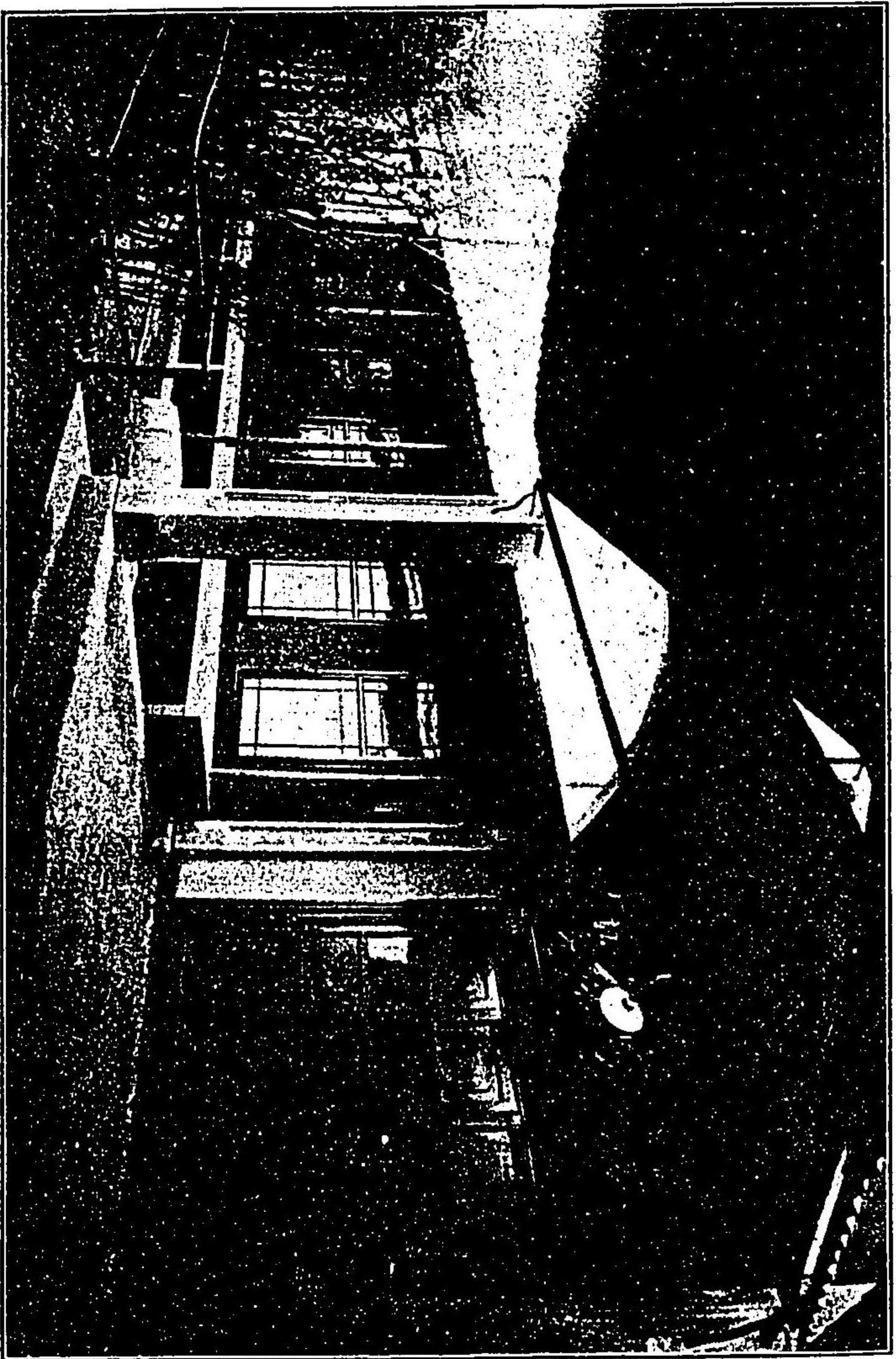


嶺重の連美保部
虎末本竹



寂妙堂母の昇居

亭の松 席定の昇呂



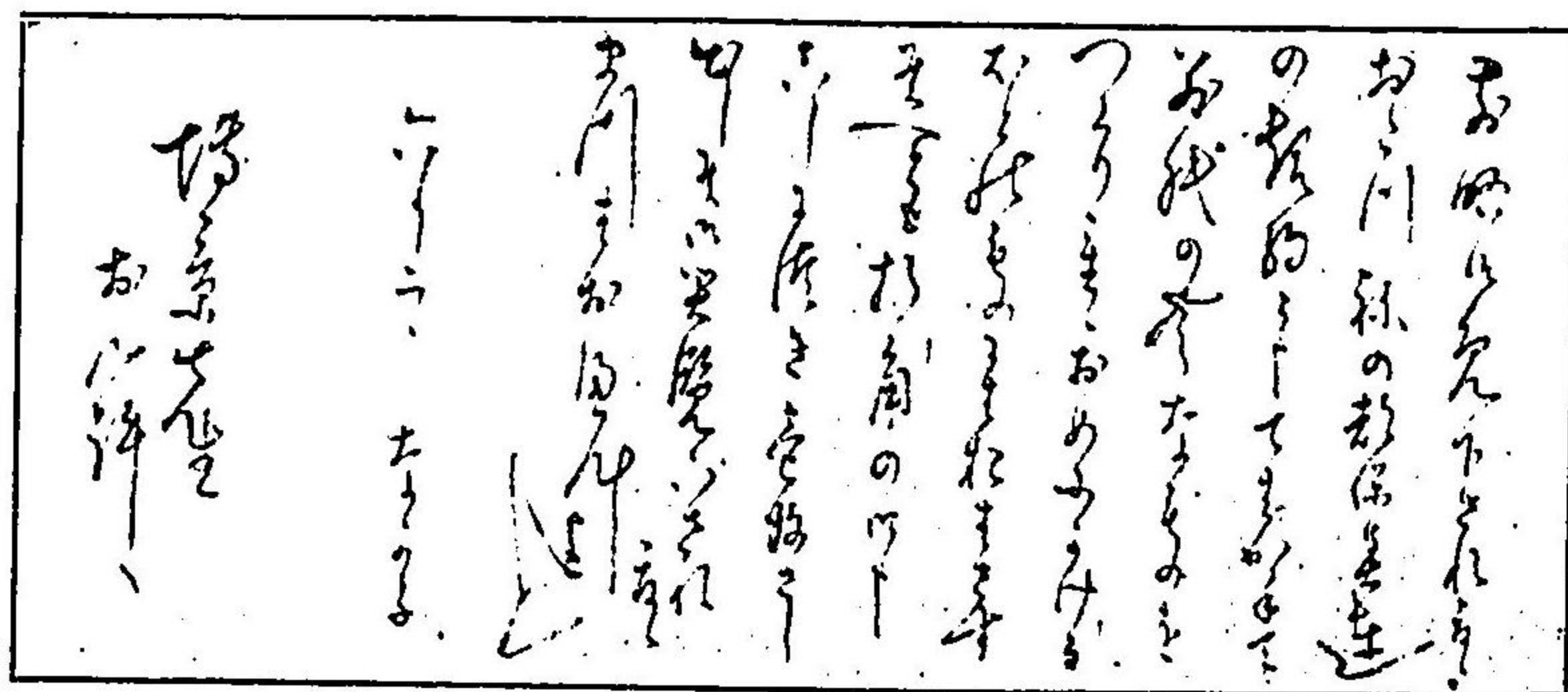


昇 呂 る 九 し 裝 正

有馬家後室の呂昇に贈りし短冊



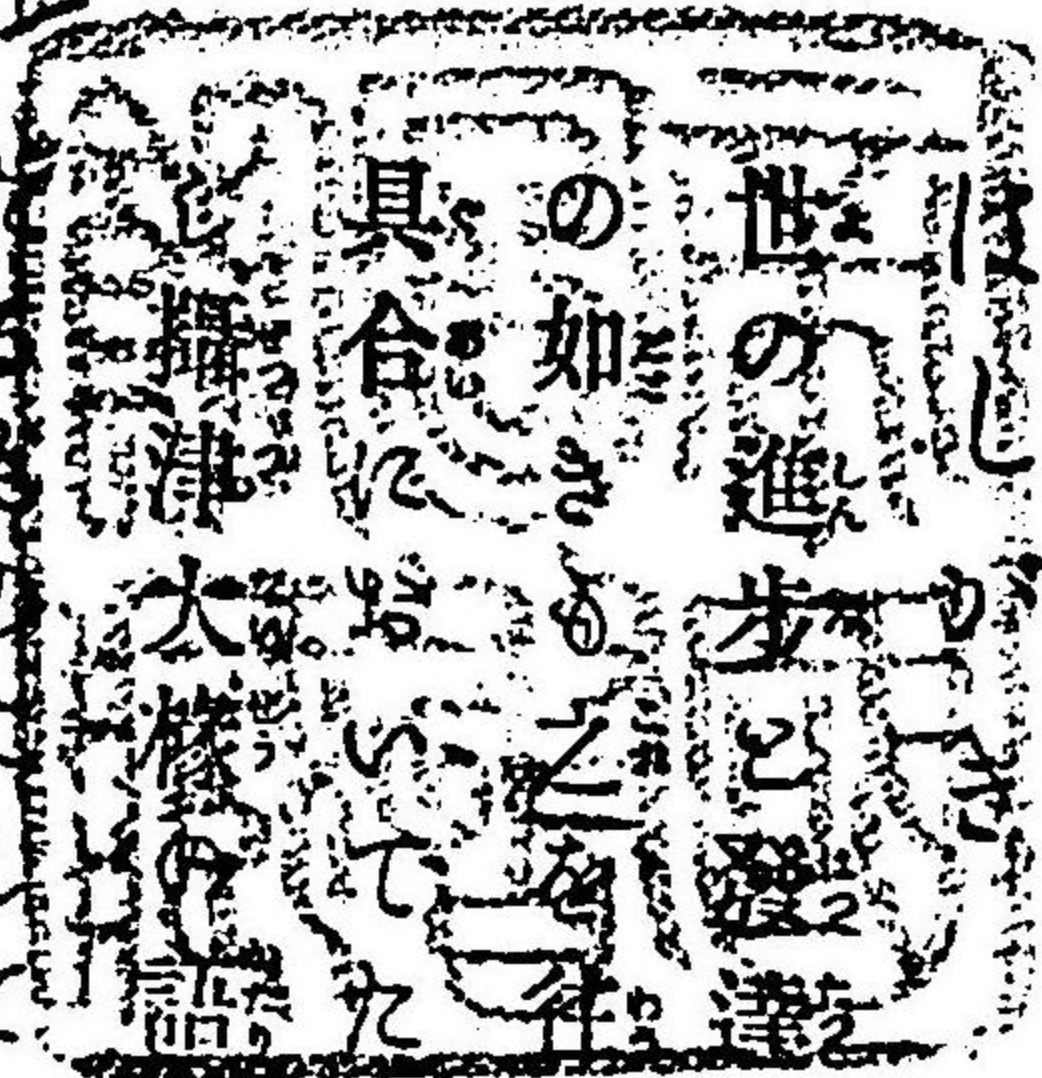
有馬伯爵の呂昇に贈りし書



呂昇自書簡書

768.42
T.622Tg

~~特253~~
~~753~~



世の進歩と藝術界にもその影響を及ぼし現に淨瑠璃
 の如きもの之を在る時に比すれば語物の撰擇においてまた語口の
 具合に於いてたしかに一段の進歩と變遷とを來し居るなる
 大塚の語口の如きは近時における斯界に一革新を與へ
 たるものにして彼れの豊艶暢達なる音聲と節調とは淨瑠璃は
 大き過ぎき聲ならざるべからずと云ひ往時のいひならはしを
 破却して今日にては大き過ぎき語口は寧ろ舊式を以て目せらる
 るに至りたり

また大塚の語口は著しく女義太夫の勃興を促すに至り此方面
 にも一革新を來さしめたり昔し風の大き過ぎき聲と語口とは婦
 人には不適當なれども大塚風の語口は婦人に適當せるものゝ

39 12 18
内三

如くされば世人の嗜好靡然として大椽風の語口に向ふに至るや女義太夫漸くに頭をもたけ今日にては男太夫は女太夫にその壘を摩せられんとしつゝあり

本書の記述する豊竹呂昇は當代における淨瑠璃太夫中の白眉にして艶麗豊富なる獨得の美聲を以て明晰なる語口をなし聴く人に徹底的の感興を興ふるの伎倆は遙かに儕輩の間に傑出し今や技藝においては攝津大椽の後継者を以て目せられつゝあり只呂昇は女性の身にして尙且つ春秋にも富まざれば其の經歷において何等の波瀾なく従つて興味ある材料に乏しきは聊か遺憾とする處なれども從來聴くの價値なれとして一般より擯斥せられし女義太夫界に斯る名手を出せしは女義太夫界の名譽とする處なるべきが故に一は一般の嗜好者に傳へ一は

後進者に資する處あらしめんとて閑に乘ト記録せしもの此冊子となるに至りぬ尙ほこは當初文藝雜誌に登載せんとせしものなるに書肆の勧めにより一冊子となしたるものなれば一部の冊子としてはすべてに於て缺點多きを免れず讀者の諒察を願ふところなり

明治三十九年十月

編者ゑるす

目次

其一	女義大夫……………	一
其二	淨瑠璃聲……………	五
其三	聲曲界に於る豊竹呂昇……………	九
其四	呂昇の幼時……………	十三
其五	遊藝と名古屋……………	二十一
其六	名古屋と女義大夫……………	二十五
其七	大阪に修業す……………	二十六
其八	愈藝人となる……………	三十三
其九	始めて上流社會の人に認めらる……………	三十七
其十	播重を去りて都保美連を組織す……………	四十
其十一	始めて九州に行く……………	四十五

其十二 九州に於る雜事……………五十

其十三 中國を巡行す……………六十

其十四 初度の東京行……………六十二

其十五 東京に於る雜事……………六十六

其十六 東海道を經久方より故郷に錦を飾る……………七十二

其十七 文明館の興行——附呂昇と南地……………七十六

其十八 再度の四國九州行——戀人を失ひ
失戀の人となる……………七十八

其十九 失戀の後の呂昇……………八十

其二十 再度の東京行と東北地方巡行……………八十二

其廿一 呂昇を呂昇とならしめし土佐太夫
と呂太夫……………八十三

其廿二 始めて呂昇を見出せし人……………九十三

其廿三 都保美連と目今の一座……………九十九

其廿四 都美保連の重鎮竹本末虎……………百三

其廿五 因社の再興と呂昇……………百七

其廿六 攝津大椽と呂昇……………百十

其廿七 京都と神戸……………百十三

其廿八 三味線と語物と姿態……………百廿一

其廿九 呂昇の爲人と藝人の摸範……………百廿九

其三十 淨瑠璃に對する呂昇の希望……………百卅四

其卅一 呂昇の談話……………百卅九

目次終

義太夫の花 豊竹呂昇

博景編

女義太夫



女性の淨瑠璃を語るに至りとは何時の頃よりなるか即ち女義太夫なるもの世間に認めらるゝに至りとは何れの頃よりなるかは今之を考へるに於て能はされども傳説によれば永祿年中六字南無右衛門女優にして出雲のお國と共に京都にて女優の長と稱せられしもの京都四條河原において始めて淨瑠璃操芝居を興行したるに珍らしき慰みなりとて大名高家より召され豊臣秀吉の上覧にも入れ果は慶長年中禁廷に召出され観覧をも辱ふするに至れりとありこの傳説の正確なるや否やは之をたしかむるに由なれども年代を明記せる處を見れば多

少據る所あるに相違なく、又永祿年間といへば今を距ること三百年以上の昔にして小野阿通が牛若丸淨瑠璃姫に通ずる事蹟を綴りて始めて淨瑠璃なるものが生み出されたりといふ時代の距ること甚だ遠からざれば女義太夫は男義太夫とその發生の時代を略は同うせしことは想像するに難からざるなり而して女義太夫が今日まで如何なる變遷を經來りしかは是亦知るに由なしと雖も兎に角何百年來——ヨシ男義太夫の如くに世間に持囃されざりしにもせよ——其の脈絡を絶やさざりしは争ふべからざる事實ならん

由來大阪は淨瑠璃の本場として古より達人輩出し素人義太夫と稱するもの亦幾千を以て數へらるゝほどにて假令口に之を語らざるものと雖も之を聽くことに於ては悉く天狗を以て任

せり而して幾百の女義太夫は常に都下に絶えざるにも拘はらず是等の聽天狗は絶つて女義太夫に耳をかさず女義太夫は聽くに足らざるものなりとして擯斥するを常とせり

是は如何なる理由によるか、女義太夫が男義太夫に比し伎倆の劣りしこと其の重なる理由なるべけれども一は男尊女卑の因習より女は男には及ばざるものなりとの先天的の習性より一慨に擯斥したるものにして所謂喰はず嫌ひの点もありしに相違なかるべし

此の如くにして女義太夫の客といへば職人か丁稚に限られ所謂聽天狗とか又は身分ある人は客とすること能はざるにより太夫自身も自ら卑下して男太夫に對抗せんなどの氣概を有する者なくツマリ「どうせ女だからてふ卑屈心より劣伎に甘ん

自ら研究し自ら工夫して其の技を磨かんとする者もなかりしなり要するに女義太夫が其の拙技に甘んト絶えて活動の念慮を起さざりしは畢竟その境遇の然らしめたる處にしてまた實際に於てもその伎倆は男太夫に及ばざりしならんが之には一の理由あるなり

古は知らざれども近き過去に於ては淨瑠璃は太き聲を出すものなりとて強いて天性の音聲を束縛して無理に太き聲としたり所謂淨瑠璃聲といふは即ちこの自然の聲を無理に太くしたるものにして此種の聲を出すの点に至りては天性上女子は到底男子に及ばざるなり近頃こそなけれ其の當時は寒聲をとると稱することありて音聲を要するの藝人は皆この寒稽古を大切なるものとしたり一体斯ることは氣管を害し咽喉を痛め聲

帯を傷ふものにして素より何等の効能あるべき筈なく却つて天賦の美聲をして劣悪なる音聲に化せしむるものなるが當時の女義太夫も恐らく此寒聲をとるが爲めに天稟の細美なる聲を故らに悪大ならしめしもの尠なからざりしなるべしされば所謂淨瑠璃聲にたいて男子に及ばざる女子が淨瑠璃に於て男義太夫に及ばざるは當然にして偶々美聲を發するものあれば淨瑠璃聲にあらず新内聲なりなど擯斥せられて結局男子と對抗すること能はざりしなり

其二 淨瑠璃聲

人の嗜好は常に變遷するものにして前に記せし夫の淨瑠璃聲は兎角耳障りがする様の感ありて押へられず枉けられざる天稟の聲の自然に發展したるものに比しては聽覺上大に快感を

殺がるゝを以て近年はこの淨瑠璃聲の習練は漸く衰へ師匠が弟子を教ふるにも力めて天賦の聲に任してそを素直に發達せしめんとせり是れ聲曲界のため頗る喜ぶべき現象にして此勢を以て進まは淨瑠璃はキタナキ聲にても宜しといふが如き事はなくなりゆくは奇麗なる聲ならでは淨瑠璃を語る資格なきものどせらるゝに至るべし然るに中には未だ此淨瑠璃聲なるものを善きものごと淨瑠璃聲以上の聲あるものを新内聲とか清元聲とか云ひて排斥せんとするものあり由來聲曲は先づ耳に訴ふるものなるが故にその訴ふる音聲が奇麗ならざるに於ては之を聽て感興を催す筈なし下手な音樂師の弄する樂器の音の汚えざるを聽て何人か快感を惹起すべき尙又キタナキ聲にては唄ふにせよ語るにせ

よ其の文句を明瞭ならしむること能はざるなり要するに聲曲の先づ最も必要とするものは美麗なる音聲にしてこの美麗なる音聲なきに於ては如何に節調に巧妙なりとはいへ之を聽く人に徹底的の感興を與ふること能はざるなりされば所謂淨瑠璃聲なるものは聲曲としては何等の價値なきものにして淨瑠璃聲以上の聲あるにあらざれば如何ほ巧みなる語口をなすも聲曲家としては敢て珍重するに足らざるなり而して淨瑠璃聲以上の聲は習練の功によりて得らるゝものにあらずしてこは生得といふより外なし之を今日の太夫に求むれば豊竹呂昇はたじかに此聲を有する一人といふを得べし勿論淨瑠璃は單に美聲を轉弄するを以て十分なりとするものにあらずして能く情を寫し聽く人に感興を與ふるを目的とする

ものなれども聲の十分なる人は到底文句を明瞭に云ひ顯はすこと能はず文句を十分に云ひ顯はすこと出來ざれば原作を通讀せしことなき人には十分に會得せむること能はず十分に會得せざるに於ては之を聽て感興を催さん筈なし今日の多數の太夫が淨瑠璃聲以上の聲を有せざるにも拘はらず兎にも角にも聽客に多少の感興を與ふる所以のものは畢竟聽客がしはく練返されて其の語物に慣れ其の筋を知り居ればなるべし文字ある人が平凡なる太夫の淨瑠璃を聽くよりも本に就て讀む方遙かに面白しと云ふは畢竟するに之を語る太夫が折角の名文佳作をわかる様に語り顯はし得ざるが爲めなり夫の近松半二が折角心をこめて作りたるものを語り殺さるゝは残念なりと云ひしは誠に尤も千萬なる申分といふべし

其三 聲曲界に於る豊竹呂昇

攝津大椽の聲曲界の名人たることは自他共に許す處なるが大椽がその玆に至りたるは詮ずる處美妙にして豊富なる聲あるが爲めなり豊竹呂昇が女性の身を以て名人の班に列せらるゝに至りたるも亦天稟の音聲を有するが爲めに外ならず情を語るの点においては呂昇以上の人多々あるべしと雖もかれの如く暢達にして艶麗、艶麗にして婉曲、婉曲にして美妙なる語口をなし如何に復雜混乱せる段物と雖も明晰に語りこなし聽く人をしして一字一句をも明かに聞取らしむるの伎倆に至りては恐らく多きを求め得ざるべし而して呂昇は流石に平凡の太夫とは趣を異にし一段物を稽古するに於ても其の全篇を通讀して始終の筋を會得し而かも其の場面の光景之に現はるゝ人物の

十
性格等を仔細に研究し十分腹に入れて始めて師匠に教へを請ふが如き夫の多くの大夫が是等の用意も注意もなく只その段物に就て師匠より鸚鵡返へじに稽古をして貰ふとは其の心掛において非常の相違あり彼女の郷里名古屋の中京新報に掲げし豊竹呂昇と題せる記事中に左の一節あり彼女が藝道に熱心なるを知るに足るべきを以て之を抄録せん

(前畧) 一体女義大夫の多くは男にも多いが只た師匠に教へられた通りを語り自ら工夫し自から研究するが如きことは稀であるが呂昇はそうでない文樂座を活きた手本として常に人物の性格場面の光景等を仔細に観察研究しかの戀と義理との衝突に基く情死の如き之ある毎に新聞の記事のみに満足せず自ら進んで其茲に至れる顛末を査察し人情の至微を

研究して淨瑠璃を語る上に應用せんとする杯實に苦心慘憺を極めて居るとのことた特に感すべきは仲間の非難をも省ず師を撰び師をかへるの一事である即ち多くの者は一人の師匠に硬いものも軟かいものも稽古をして貰ふのであるが呂昇はモノによつて師をかへ悪く云へば師匠浮氣善くいへば師匠撰擇をするのでこの撰擇が彼女をして時代物に世話物に硬に軟に艶に華に何でも御座れる的に成功せしめたのである

彼女は常に攝津大椽を崇拜しすべての型を大椽にとつて居るとのことである夫の悠々として落つき拂ひ毫も迫る處なく肩衣の着付の凜々しく姿勢の亂れざる處しかも何を語つても綽々として余裕のある處將た又サワリの婉曲にして輕

妙輕妙にして艶麗なる處頗る大椽に似た處がある、兎に角女子の身を以て斯くまでに成功したのは女義太夫界の名譽と云はねばならぬ(後畧)

聲曲に湛能なる人は皆齒並がよく之が麗はしき音聲を發するに非常の助けをなすこととなるが齒並が發音に關係あるは云ふまでもなき事にして呂昇の齒は純白にして一種の光澤を有し恰かも細工したらんが如くに行儀よく並び居れるが之も美妙なる音聲を發するに大なる補助となるべく又その咽喉は著しく發達し恐らく聲帶も普通に異なるものあるべくかたがた是等が流麗にして且つ豊富なる音聲を發せしむるものなるべし尤も只音聲に富みたればとて必ずしも巧妙なる語手となり得るものにあらず常に工夫研究し聲以外に語るの術を會得

するにあらざれば名人とはなり得ざるなり呂昇は聲あるが上に聲以外に語るの術を心得尙且つ常に工夫研究して怠らざるこのことなるが是れを彼女が今日に至りたる所以なり

其四 呂昇の幼時

呂昇は本名を永田仲子といひ明治七年名古屋市上宿に生る父は永田爲吉といひ名古屋藩士なるが維新後江川端町にて鹽物問屋を營み居りしが仲子が十一歳の時病没し爾來仲子は母の手によりて養育せられぬ始めて淨瑠璃の稽古をなせしは十二歳の時なりしが之より先き彼女は常盤津の稽古をなし居りしに叔父某淨瑠璃を好み仲子の音聲の如何にも麗はしく且つ豊富にして而かもその唄ひぶりの非凡なるより淨瑠璃に成功すべきを看破し試みにサワリの一節を教へしに果して頗る器用

なる處ありこれより常盤津を學ぶの傍ら叔父は熱心に淨瑠璃を教へたるが勿論叔父は仲子を藝人とするの念慮は毫もなく只自身が好きの道とて慰み半分に仕込みとなり當時名古屋に浪越太夫といふ人あり今は土佐太夫の名跡を継ぎ五代目土佐太夫となり同地における斯界の立物なるが同人は或時叔父某の宅を訪れ仲子の稽古を聞て太く感心し叔父に向ひこの聲あるからには必ず發達すべしなと頻りに賞讃せしに叔父は頗る満足の体にて其の時土佐太夫に弟子とせんことを依頼し同人も喜んで之を諾し斯くて仲子は愈土佐太夫に就て本式に淨瑠璃を稽古することとなりしが此時仲子は十三歳なりし無邪氣にして可憐なる少女は爾來土佐太夫に就て稽古を勵み

しに天稟の藝才は日を経るに隨ひてますます發展し二葉にして香ほしき旃檀は十六七歳の頃には既にその香を四方に放ちて仲子の名は漸く嗜好者の仲間知らるゝに至りぬ當時上宿に七福座と稱する寄席あり淨瑠璃を始め各種の演藝を興行せしが仲子は時としては補助として之に出勤せしことありしに本名の儘にては面白からずとて師の土佐太夫より仲路とせも稱すべしと注意され爾來仲路の名を以て演藝會等に出演し嬌喉を弄するに至り師の土佐太夫彼女について予に語りしことあり曰く

仲子の音聲は生得であんな聲は稽古や鍛錬によつて出るものではないありません始めて私の處に稽古に來た時は勿論ほんの子供のことですすから極くほんやりしたもので口數もきゝ

ませず誠に應揚を可愛らしい見せした、記憶はまことに善い質でした。が凡てが應揚です。から稽古をするにもホトツトした處がありまして聲がたつぷりある上に延びくした語口です。から始めから私は此子こそはと望を屬して居りました。が然し今日のやうにならうとは思ひません。で實は斯程までに上達したのには案外して居ります。一、二人間は何をやりました。ても心掛が肝腎で御座います。て誠實な處がなければなりません。あの子は應揚なほんやりした處があります。中にも誠に心掛がよろしう御座います。て其の上師匠に對し亦同僚に對し極めて誠實なところがあります。たしかあの子が十五歳の時たと思ひますが私の一座が知多郡愛知縣の横須賀にまゐりました。時仲子を始め大勢の弟子を連れてまゐりました。

が船から上陸します。時に荷物を運ぶ人足が足りません。で私。が一つ大きな荷物を提げて居りました。處が外の弟子は知らぬ顔をして居ります。のに獨りあの子がお師匠さん妾が持ちます。と云ひて私がお前がこんな重いものを持てるものか。と云ひます。にも拘はらず無理に私の手から荷物を引取り汗をダラダラ流しながら引摺るやうにして宿まで持つてゆきました。私はその時實に感心しました。があの子の平常の所作はすべて斯うで御座います。て技藝の上の心掛は勿論其の外にもどこか人に違ふ所がありました。それから生れが生れです。から何處となく氣高い上品な處があります。て之が自然藝の上。に顯はれます。から稽古をしてやつて居ります。ても誠に心持が宜しう御座います。一、二人間になりまゐるものは兎角

品性が下るもので上品とか高尚とかいふやうな品格を欠く
 ものです。が仲子はそうではありません。したから私は常にお
 前は藝人になつて了うやうなことはあるまい。屹度ちやんと
 した人の奥様になるに相違ない。とあの子に申して居りまし
 た。が私の此見込は外れまして。到頭藝人となつて了いました。
 之は境遇が然らしめたので。只今のやうになつて見ますとナ
 マシカを興さんになるより餘程宜しう御座います。先達ても
 あの子を蟲負にして下さる方が呂昇も立派なものになつた
 がどうぞ。此上慢心が出ねばよい。がと申されました。私は之に
 對し御尤です。が其の御心配は御無用です。あの子の性質は私
 がよく知つて居ります。がなか／＼思慮のある女を別にたい
 した苦勞をしたことも御座いません。がよく世の中の事を辨

へて居りまして。只今は座長として一座を率ゐて居ります。が
 一座がよく調和して一向に内輪に苦情のありませんのは一
 つはあの子の生得の誠實を以て處してゆきますから。でもあ
 りませう。が少しも高慢らしい處のないのが一同を悦服さ
 して居る譯で御座います。本人もまた／＼自身の藝は未熟だと
 いつて懸命に稽古を勵んで居りまして。藝道に關しては勿論
 すべてに於て人の忠告や注意は喜んで受けまして。此点にお
 いては誠に殊勝なところが御座います。あの子に若しも慢心
 が出るなればもう既に出て居らねばならぬのです。が今日ま
 で微塵もその氣がなく。自身の弟子にすら機敷に出て聽いて
 貰つて悪い處を直すといふやうな心掛です。から此点は大丈
 夫です。尤も左ればと云つて自信はあります。自分が善いと信

ト九事は多くの女太夫のやうに兎や角取越苦勞をして自
 ら卑下し自から卑屈になる様なことはありません曾て私に
 こんなことを云ひました妾は自分が語つて居る淨瑠璃の事
 柄がお客さんにわかるか知らんと思ふて苦勞になりえますが
 何でもお客さんにわかるやうに語らねばならぬと思ひます
 が何うでせうと申しました私はその時膝を叩いて賛成しま
 した如何にもその通りで人形があれば床の淨瑠璃も引立つ
 てよくわかるが素淨瑠璃ではわかりにくいもので殊に大勢
 の人物が出てくる混雑な場面などはドレがドレかわから
 なくなりますがあの子の淨瑠璃が子供にでもよくわかりま
 すのはツマリ此心掛があるからで御座います兎に角自信が
 あつて高慢に流れずその上に心掛が宜しいのがあの子をし

て始めて今日のやうにしたので御座います
 子を見ること親に如かざるが如く弟子を見ること亦師に如か
 らずで土佐太夫の右の談話は呂昇の性格の一斑を知るに足るも
 のにして延て彼女がよく今日の如く成功するに至りし所以を
 も窺知するに足るべし

其五 遊藝と名古屋

名古屋は昔より遊藝の發達したる處にして舞踊において西川
 經三郎を出せし外これといふ藝道の名人を出したることとはな
 けれども市人の一般に遊藝に熱心なるは他にその比を見ざる
 處なり現に名古屋藝妓といへば東西の人より直ちに藝道に上
 達せるが如くに見做され居るは人の知る處なり往年東海道鐵
 道全通の祝賀會を名古屋に開きし際東京大阪京都の三府より

藝舞妓を撰抜して歌舞の餘興を催し恰も三府一市の藝舞妓の演藝共進會を開きしが如き事ありしが其の時名古屋の藝妓は三府の藝妓に比し歌舞音曲共に最も優秀なりとの評判ありとてても其の遊藝の發達し居るを伺ふに足るべし、いづれにても遊藝は名古屋人のマシナミとする處なれば此地に生るゝの子女は知らず識らず之に感染し果ては朋輩間に競争心を起して之に熱中するに至るなり

斯かる土地に生れし呂昇はいつしか此渦中に投せられ且つ稍や淨瑠璃の趣味を解するに至りてはますます之に熱中しその極稽古に夜を徹しては四隣の安眠を妨げ家人より注意を受けしこと屢ばにしてまた之がために健康を害したることもありしといふ斯くの如く名古屋の人は總トて遊藝狂の傾きあれど

も獨り淨瑠璃に至りては大阪に及ぶべくもあらざりて隨て淨瑠璃の流行は大阪ほそにはあらざるなり左りながら市人の之に對する嗜好は敢て大阪の人に劣ることなく之といふ名人上手こそ出でされ本職の太夫も随分多く素人にして之を口にする者も亦尠ならず夫の東京に於て一時非常の人氣を博し今も尙ほ昔時の情力によりて一方の覇たる竹本京枝は名古屋の出身にして同女は實に名古屋における女義太夫中興の人といふべき人なり京枝が一たび東京において聲名を博するや名古屋の女義太夫は之に促されて大に色めき來り殆んど面目を一新せしほどの概ありて今も現に東西に於て多少其の名を知られ居る名古屋出身の女義太夫少ならず試みに重なるものを列記すれば左の如し

竹本京枝	竹本土佐吉 <small>(死)</small>	竹本京佐渡	豊竹巴幸 <small>(死)</small>	竹本清吉	竹本源之助	竹本京勝	豊竹巴勝	竹本土佐辰	竹本伊達之助	竹本播玉
竹本金枝 <small>(死)</small>	豊竹駒吉 <small>(死)</small>	花澤柳	竹本一丸	竹本京駒	竹本小土佐	竹本土佐玉	竹本土佐勝	竹本土佐駒	竹本小綱	豊竹花鞞

此他東西の各席に於て二枚目若くは三枚目を語れる者は擧げて數へがたきほどにて現に呂昇の弟子にして其の一座に加はり居る喜昇の如きも亦名古屋出身にして而かも將來頗る有望なるものあり之を要するに遊藝の地に人となり四圍の境遇に刺激されしことも恐らく呂昇をして今日に至らしめたる一因なるべし

其六 名古屋と女義太夫

名古屋における女義太夫の繁昌せることは前項の如くなるが之をして茲に至らしめしは呂昇が大阪に修業するまでの師匠たりし五代目土佐太夫の力與つて多きに居るもの、如く同人は身を素人に起し遂に本職の太夫となりて土佐太夫の名跡を繼ぐに至りたる人なるが愈本職の太夫となるに及びては斯道の爲に盡す處あらんとし多くの門弟を養成しゆくは大阪における文樂座の如き淨瑠璃の定席を設けんと企て去る二十

九年に至り自から卒先して同志を語らひ大阪の因社に倣ひて愛知因社なる男女太夫の同盟團體を組織し自から總取締となりて斯道の研磨に力め素性よき將來に見込あるものは大阪に修業に出し専心名太夫の養成に盡力し次で世間の人氣女義太夫に向ひ漸次その傾向を高め來りしより爾來は女太夫の養成に一層力を入れ直接に間接に勸奨する處ありその結果女義太夫は益勃興して呂昇は別と兎にも角にも東西の各地の席亭に眞打とし多少世間の名を知らるゝ前掲の連中をも名古屋より出すに至りたり而して女太夫の産出は今日も尙益盛んにて呂昇の如きは名古屋より新たに弟子として養成を依頼するもの常に絶ふることなしといふ

其七

大阪に修業す

呂昇は仲路の名を以て名古屋の聲曲界に嬌名を専らにせしこと前後數年なりしが十九歳の時に大阪より呂太夫越太夫(今の住太夫)の一座名古屋に至りて同地の千歳座に興行したり之より先き彼女は大阪より名ある太夫の名古屋に至ることに傳手を求めて稽古を請ふを常としたりしが此時もかねて呂越の聲名を聞けることとて師の土佐太夫を介して呂太夫と越太夫との面會を求め稽古を請ひたり其時呂太夫は彼女の熱心に感ずる處あり試みに一節を語らしめしに音聲豊富にして尙且つその語口の如何にも延びくとして質のよきに感心し當時同人は之といふ將來見込ある弟子なく男子にまれ女子にまれ之を得んことを希望し居りし折柄なりしを以てこれぞ我日頃の望を達するものなりとし喜んで之を承諾し越太夫にもその趣を

語りていよく弟子となすことゝしたり呂太夫が彼女について予に語りし一節に曰く
 あの子が始めて稽古をして貰いたいと云つて來ました時ど
 んなものを稽古して居るかと思ひますと今御所櫻を稽古し
 かけて居るごのことでしたからまあ云ふ通りにやつて見ま
 した處が實に案外しました聲は十分聞き切つて夫れに覺え
 がよくて教へてやり甲斐がありますから口にこそ出させ
 んでしたか之は立派なものだ行末頼母しい子だと思ひま
 して實は喜んで弟子にとりました當時あの子は土佐太夫さん
 の弟子でしたか其の時は懇意な方々から是非稽古をして
 遣つてくれこれだけ聲のある質のよい子を名古屋に置いて腐
 らすのは惜いから是非一度は本場所の大阪に出して磨かせ

たいと云つたやうな希望もありましたので大阪に連れて歸
 ることになりましたがさて大阪につれて來てからも私はあ
 の子には本當に身を入れてたどへば外の者にはそりでもあ
 りませんでしたがあの子だけは本式に腹帯をちめて稽古
 をしてやりました宅の者からも終始あなたは呂昇にはエラ
 イ力を入れてやられますなど云はれました位で随分澤山な
 弟子を仕込みましたがあの子ほど力を入れたものは御座い
 ません夫れに申しますもツマリは十分望がありましたから
 ぞ御座います

斯くて呂太夫の一座は名古屋を打ちあけて一旦大阪に歸り更
 に越路太夫(今の攝津大椽)と共に京都にて興行することとなり
 しが恰も仲路もまた小土佐の一座に加はり京都にて興行する

等なりしゆゑ呂太夫の歸阪するに際し仲路は京都まで同行し
 たるが瀛車中にて師の呂太夫より呂昇の名をもらい斯くして
 名古屋において仲路の名を以て賣り出せし彼女は名古屋の地
 を離るゝと同時に其の名を捨て、今日の呂昇となりたり。
 京都にては大椽呂太夫の一座は四條の南座にまた小土佐呂昇
 の一座は京極の寄席において興行したるが呂昇は京都にては
 初めての興行にして京都の人は無論呂昇なる女義太夫を認め
 居るにはあらずしが其の美聲にして艶麗なる語口は忽ち
 して非常の人氣を呼び、最初一座は十日間の約束を以て上洛し
 たるものなるに連夜満場の好況につれられて日延べに日延べ
 を重ね遂に約一ヶ月の長きにわたり此間殆んど京極の諸興行
 物を壓倒し去りたりといふ

女義太夫は眞面目に聴くべきものに非ずとして一概に擯斥さ
 れし當時に於て斯かる盛況を呈したるは京都に於ては殆んど
 空前の事柄にして今日同地に於て呂昇が如何なる太夫よりも
 人氣を博し、毎年四五回も上洛し而かも常に第一流の大劇場に
 興行して一等俳優の演劇よりもより多くの歡迎を受くるもの
 素より其の技藝の然らしむる處なりとはいへ、一は女義太夫に
 も斯んな語手があるかてふ觀念を其の當時において京都の人
 の腦裡に印せしめしが爲めなるべし
 京都における三十日間の興行を終りし後小土佐は名古屋に歸
 り、呂昇は大阪に出でいよく本場所に足を入れて本修業に身
 を委ぬることとなりしが此時は彼女が十九歳の娘盛りにして
 明治二十五年の六月なりし、當時京都に刊行せし一雜誌に一座

の批評を掲載せしうち左の如き一節あり

(前略) 一女義太夫は殆んど醜婦に限られたるが如き觀ありて音聲もまた發音に無理なる處ありて澁惡なるもの多きもの、如くなるが獨り一座中の呂昇は此格を外れ容姿音聲共に群を抜きて恰も鳥群の中に一羽の白鷺を見るが如し、由來名古屋は美人の産地にしてまた遊藝の發達せる處なりと聞けるが呂昇は姿色技藝兩ながら名古屋を代表せるものと謂ふを得べし、年齢は十九歳とのことなるが色白くフツクリとたる可憐にしてシマリたる面貌に無限の愛嬌を含み、尙且つ見臺に向ひても始めより終りまで優美なる姿勢を亂さず飽くまで上品にして飽くまで優容なる處はさう見ても良家の令娘にしてまた年齢も一ツ二ツは若く見ゆるなり、兎に角女の

義太夫にして斯かる愛嬌ある美人にして而かも未熟なる處はあれども斯くも艷麗にして達者なる語口をなすものは恐らく多きを求め得ざるべく京洛の人氣が目下此一座に集注せるは無理ならぬ事といふべし(後略)

其八 愈藝人となる

呂昇が大阪に出でし當時の同地の淨瑠璃界は越路太夫今の攝津大椽が旭日の勢を以て人氣を博し、彌津呂越今の住大隅等もた當代の達人として夫々人氣を呼び古今の名人と呼ばれし春太夫時代にも劣らぬ盛況を呈し、隨つて只さへ擯斥されし女義太夫は殆んど見る蔭もなき憐れなる有様なりし、勿論その當時にありても今日ほさにはあらざりしが女義太夫席としては清津橋の播重席道頓堀の金城席今はなむ天満の南

歌久席等ありて照玉東猿末虎長廣等いづれも立者として相當の人氣を有し男義太夫の向ふを張るなどは素より思ひもよらざりしが兎にも角にも之に對抗して微弱ながらも一方に旗を翻へせしなり

呂昇は名古屋に在りし時は藝人を以て世に立んなどの考へは少しもなく人に勧められて公開の席に出演せしうち其の非凡の技が自然人氣に投つて喝采を博するより知らず識らずたまには藝人の群に交はり勧めらるゝがまに〜小土佐などの一座に加はりほんの一時の補助として地方興行に出かけしこともありしがコハ寧ろ慰み半分にして又同女の母も娘を藝人となさん考へは全くなかりしなり然るに偶然にも呂太夫を師として大阪に出で大阪の淨瑠璃界の名古屋と違ひて盛大なるを

目撃し又女義太夫界を見るにかねて名古屋に在りて想像せしほごのこともなく是れならばといふ自信より愈身を其の社會に投つ少くとも女義太夫界に光彩を放たんとの野心を以て茲に始めて藝人として世に立んことを決心し爾來師の呂太夫に就て一心不乱に稽古を勵み文樂座を斯道の學校と心得同座の興行ごとに毎日床本と辨當を携へて之に通ひ苦心慘憺たること半歳餘なりしが其うち播重席の席主播直之助に見出されて同席に出勤する事となれり

此時播重席は東猿を眞とし長廣その他人氣ある太夫を集め女義太夫席としては第一流にありしが呂昇は突出しより三枚目に裾へらるゝことゝなりたり技藝は兎に角斯道においてはいたく見くびられし名古屋仕込の彼女が突如として此重要な位

置を占めしことは甚たしく一座の不平を惹起し果ては不平連合同としてその排斥を企つるに至りしに彼女が旅鳥の悲さには兎角に居り心宜しからず自信と決心とには強き女ながらも流石に女性の氣弱くして何となく心細き感を起し一時引退を思ひ立ちて席主にも其の意を漏らしたるに席主は深く彼女に見る處あり種々慰諭して遂に不平連數名を斥け呂昇一人を其の座の身上として興行を續けたりしにその美聲は早くも嗜好者仲間に喧傳せられ播重席は連夜大入りの盛況を呈したり斯くて呂昇は同席に勤續せしこと滿五ヶ年の久しきに亘り播重席は呂昇席とまで稱せらるゝに至り席主も此間に尠なからざる利益を得千日前に壯大なる寄席を新築するに至りしがことは多くは呂昇のお蔭にして呂昇もまた多くの女太夫が各所に

流浪して終始一貫の根底を固め得ざるに反し名古屋を出で、之といふ後援者もなき旅の空に始めよりマゴつきもせず鰻上りに昇進して今日の位地を作りしもの大に播重席に負ふ處あるべし

其九

始めて上流社會の人に認めらる

今は廢絶し居れるが大阪の第一流の藝人相集り文藝家文學者其の他の後援を得輕々しく劇場又は寄席等に出入するを憚る身分ある人々の娛樂に供せんとして毎月一回南地の演舞場に於て共樂會なる名稱を以て演藝會を催せしことあり出演者は俳優もあり落語家もありまた義太夫もありしが何れも第一流の藝人かさもなくば其の資格を有する人氣あるものに限られ居りしが同會の幹事貫名駿一氏別項に記するが如き次第により

て呂昇を出演者の一人に加へんことを諮りしに他の幹事中には共樂會は技藝に優れたる者を撰拔し大阪における唯一の演藝會となし居るものなるに女義太夫風情を加ふるは如何あらんかとして異議を唱ふるものありしが此時は既に呂昇の名聲は次第に揚りつゝありし折柄なれば兎も角も試みにその語振りをみて然る後に採否を決せんとて幹事一同打揃ひて播重に出かけ之を聴きたるにその語口の艶麗にしてまた語振りの上品なる名ある太夫中にも多く求め得ざる程なりしかば一同これならば共樂會の出演者として申分なきのみか錦上更に花を添ふるものなりとて即座に出演者の一人となすことに決し同女にも交渉して其の承諾を得かくして呂昇は共樂會の開會ごとに演舞場において嬌喉を弄する事となりぬこれ同女が大阪に

出でし翌年の冬にして二十歳の時なりしが此一事は同女にとりては大なる名譽にして又上流社會の人はその伎倆を認めらるゝ階段となりとなり

當時の淨瑠璃界の状況を知るものは恐らく記憶するなるべし、女義太夫席の客といへば前にも記せし如く殆んど職人か丁稚にして身分あるものは決して足を入るゝことなく随つてたごひ男太夫以上の伎倆あるものと雖も中流以上の人にその技を認めらるゝの機會なかりとなり現に昨年死亡せし照玉の如きまた長廣の如き末虎の如きその伎倆に至りては優に名ある男太夫を凌ぐものありと雖も單に女義太夫なるがために之を世人に知らしむるの機會を得ずして謂はゞ埋れ木の姿となりたるなり斯かる有様なるの折柄呂昇は紳士淑女を客とせる共樂

會に出演する事となりこれまで其の名は聞えたりとも其の實力は中流以下の人のみに認められしものが一躍して上流の人にその實力を示すことを得これよりして呂昇の名は良家の家庭にも喧傳せられ播重席の顧客も次第にその種を善くする事となり上阪以來僅かに二三年にして女義太夫中の白眉として持囃さるゝに至りたり

其十、播重を去りて都保美連を組織す

此の如くにして呂昇は前後五年間播重席に勤続し同席は呂昇席とまで呼ばれし程の密接なる關係を作りしが席主播直之助は呂昇の共樂會に出演するを厭ひしばく同女に迫りて出席を思ひ止らしめんとしたり然るに同女は勵精練磨の効ますます現はれて技藝いよく上達し音に世評の喧しきのみならず

自身も多少信ずる處ありて時には上流の人に接してその技を見せしめたまき希望を有しまた斯くすることは定席たる播重席の利益となるべきを思ひ腹心を吐露し且つ利害を説いて之に應せざりしが席主は一概に呂昇は播重席に於てよりは聽くことを得ざる即ち播重席專賣のものとしたき狭き量見より尙も共樂會出演の中止を強請して止まず果は種々の虐待を試みて強制せんとするに至りしより茲に端なくも兩人の間に衝突を生じ爾來席主はあらゆる無情の手段を以て虐遇するより女ながら自信に強くして且つきかぬ氣の彼女は此上は是非に及ばずとて斷然播重席を去る事に決心し席主に其の意を通したるに流石頑強なりし席主も斯くと聞きて狼狽し俄かに我を折り且つ種々甘言を以てその決心を翻へさしめんと試みたれど

も一たび決心せし彼女は到底是等の甘言に動くべくもあらずして遂に同席を去りて全く關係を絶つに至りたり此時は明治三十年の三月にして彼女が二十四歳の時なりし演藝界より全く擯斥せられし女義太夫の中に立ちて僅か數年の間に而かも縁も由もなき旅に出で、後援者があるでもなく引立てゝくれる人があるでもなく全く孤立の身を以て斯くまで成功して其の名を滿都に知らるゝに至りしは如何にその技藝が天品に出づるは云へ普通尋常を以て爲し得らるゝものにあらず此間に練磨研究せしこと一通りにあらずしてツマリ苦心慘憺の餘に出でしことは云ふまでもなき事なるが斯くも辛酸を嘗めて成功の域に達せんごせしに其の播重を去るの事情が表面上如何に一時の行掛りとはいへ五年間の辛抱を一朝

にして抛たんとせしからには必ず其の以外によくの事情ありしに相違なく左れば彼女は此時においていたく世の無情を感じたるものご見よ播重と關係を絶つと同時に名古屋に歸らんことを決心し爾來他の席より招聘せられたること屢なりしも之に應ぜず日夜快々として樂まざりしが其のうち平素彼女の技藝を賞して愛顧を垂れし貫名氏始め二三の紳士さまごまに慰諭して歸國を思止まらしめ自ら後援者となりて當時一方の重鎮にして伎倆また拔群の聞えありし照玉末虎等と共に一座を組織せしめ都保美連と命名して北區曾根崎橋南詰の萬亭を改築し同一座の定席として一座は愈此處に旗を擧ぐることとなりぬ既に南地において盛名ありしものが北地に來りたりて其の聲價を落さん筈なく寧ろ大に歓迎せられて開業早

早非常の人氣を博し暫時にして都保美連の名は遠近に傳はりて他の連中を殆んど壓倒するに至りたり然るに不幸にも僅か半年餘にして萬亭は不慮の火災に遭ひ一座は三味線見臺は勿論肩衣より小廻り物に至るまで悉く焼失し殆んど再び起つこと能はざる程の打撃を蒙りしが既に此時は女義太夫も呂昇の如き人氣者を出したる事とて大に位地を高め世間よりも以前に勝る待遇を與へられ一座の者も頗る心強き感をなし居りし折柄なれば獨り呂昇が播重以來一種の神經を起して再び名古屋に歸らんなきの弱氣を出したるにも拘はらずさまたく慰藉し死なば諸共の覺悟を以て今一度は旗を揚ぐる事とし間もなく堀江の明樂座に打て出づる事となりぬ此時は一座はその運命を決する時なりと覺悟し懸命の力を絞

りて勵精したりしかば此處もまた萬亭に劣らざる人氣を得五十日間連夜札止の好況を呈して再舉の旗は見事に花を飾りて一座は元氣大に復活し斯くて一時歸郷の念を起すなご惰氣かへりし呂昇は翻然として再び決心の臍を固め此上の成功を大阪の地に於て遂げんことを心に誓ひたり

其十一

始めて九州に行く

之より先き呂昇の名は獨り大阪のみならず九州にまで聞えたりしと見ゆ堀江の明樂座に興行中同地の某興行元より招聘の交渉に接したり此時は萬亭の災厄に遭ひし後一座漸く復活し居りし際にて尙又明樂座の人氣は少しも衰へず一座の名聲は日増しに揚がりつゝありしゆゑ實は今暫らく大阪に在りて其の根底を堅めんと希望を有し居り一應は辞退したれども先

方より再三の請求に逢ひて最早辞するの言葉なきに至りたれば旅稼ぎの瀬踏みをなすも一興ならんと遂に之に應じていよいよ九州行を決行し先づ博多に至り夫より久留米佐賀熊本八代長崎を経て更に若松小倉中津を打廻はり行橋直方飯塚二日市等の小市街よりの招聘にも應じたりといふ

由來九州は割合に藝道に興味を有する土地柄にして殊に淨瑠璃は最も同地の人の嗜好する處にして攝津大塚の一座も大隅の一座も前後四五回も赴きたる位にて之といふ名ある太夫こそ出でされ淨瑠璃語りは至る處非常に多くまた素人義太夫も随分盛んなりとのことにて是等の事情を聞知せる呂昇は愈乗込みと決するや多少氣にかゝりたりと見え平素恩師と仰ける故豊澤廣助が大塚の一座に加はりて九州行の経験あるより同

人の許に赴き九州といへば何となく武張りて聞ゆるが淨瑠璃もいづれイバリの方が人氣にかなひ妾の語口のやうな艶にては宜しかるまゝとて最と心配氣に尋ねたるに廣助は決して左様のことはなし人情は何處も變るものには非ずして大阪の人が聞て面白ものは矢張り九州の人が聞ても面白いに相違なしお前の語口は越路さん(今の太塚)の流義なるが越路さんはあの語口を押通し至る處非常の人氣を得たれば決してそんなこととに心配せず自身の得意な語口を無理に枉げて諺にいふ虎を描いて猫になるやうな眞似をすべからず私の経験によればお前の語口ならば必ずウケるに相違なきゆゑお客大事に熱心に勤むべし既に藝人となりたるからは素人が慰みに語るとは違ひ夫れが商賣となつて居るゆゑ客の氣に入るやうにして其

の時世に向くものを語り殊に男と違ひ女のことゆゑ強いて無理なもの語るなどは宜しからず總トていづれの語物にしても愛さぬいふものを失ふべからず此心得を以てその本職に身を入れるは勿論客を澤山に呼びて請元に儲けさすことをも心掛けるべからず客も大勢這入り請元も儲ければ人氣は自然に出るものなりヨシ自分のみは如何に上手に語ると高くまつて居つても請元に損のみさしては商賣にはならぬもの故一つには商賣といふことをも忘るべからず當時はいづれの地も艷物を好むの傾きありて九州も同様なれば持前のものを語りて無理なるものを出さず決してイ・バリなど不得意なるものを語るべからずとて懇々説諭せしに呂昇はかねて深く信頼せる同人のことなれば大に喜びて頼る心安き思ひをなす喜び勇んで

出發したり
斯くて彼地に乘込みても常に廣助の言を守りて得意とする處のもの、外に心をそらさず慎重に眞面目に且つ熱心に勤めたりに果して至る處非常の人氣を得各地とも日延べに日延べを重ねて前後六ヶ月の長きに亘りたりといふ今各地に於ける興行日數と興行場を見るに左の如くにして何れも一流の劇場にして大阪下りの名ある俳優にてもかく長き興行をなしたる事は稀なりといふ

博多 熊本 長崎 小倉 中津 久米 若留 松

共座 東雲 板日 朝菜 惠比須 朝日 座

三日 二十日 二日 二十三日 十日 十五日 十日

始めて博多に乗込みしは年末にして到底客を呼ぶこと能はざるべければとて正月早々より開演せんとの説興行元の間に起りしが呂昇の名は既に市人も聞き及び居れば當るか當らぬかは其の時の運として兎も角も開業すべしとの事に決し世間は既に歳末年始の準備に忙がしく興行物なごに氣を寄するを許さざる十二月の二十五日に蓋を開けしに意外にも初日早々大入續きにて三十一日の大晦日にも満場の好況を呈し斯かることは同地には絶て例なき事なりといふ

二度目博多行の時なりし偶々呂昇は病氣にかゝり略は全快はしたれども氣分すぐれざればとて乗込みの町廻りを謝絶せしに折角の町廻はりに肝腎の同女が抜けるは宜しからずとて

遂に駕籠にて町廻はりをなせしことありし從來同地にては一等俳優に限り特に駕籠にて町廻はりをなさしむる慣例にて其の他はいづれも腕車に限り如何なる事あるも駕籠を許さざるが此時呂昇は一等俳優の格を以て待遇せられしなり

また同地の箱崎八幡の放生會といふは其の地方にて有名なるものにして市人は毎年八月十五夜(舊曆)の觀月を同社の境内に催し此時は全市の人殆んど同境内に集るこいふも不可なきはとにて何れも行厨を携へ子女を伴ひ一年における家庭の樂みをこの一夜に於て買ふものとし如何なる興行物といへども當夜は休止するを例としまたヨシ休止せざるも到底客を呼ぶこと能はざるものなるが興行元は呂昇は特別の人氣を有し既に年末興行に大當りを見しが如き先例を破りし事もあれば此度

も先例を破るの覺悟にて試みに興行を續くることにすべしとて遂に其の夜休業せざりしに果して見事先例を破りて場内壞んばかりの大入りなりしといふ

豊前の中津に乗込みし時一座の太夫元と同地の興行元との間に些少の行違ひを生ト終に太夫元自から興行主となりて蓬萊觀と稱する劇場において興行する事としたり一座は元より同地には始めての乗込みにして不知案内の土地柄なれども大阪一流の俳優も屢到り又攝津大椽大隅の一座も再三興行し且つ蓬萊觀と稱する劇場は規模宏大にして地方には稀に見る大劇場なれば演藝に對する市人の趣味も略は想像せられこれたけの土地柄なれば土着の人の手を借らずとも大丈夫なりとし、愈興行を始めたるに是等の社會の習ひとして先に交渉を試み

し土地の興行人は嫉妬的の惡感情より種々妨害を試み興行披露の廣告の如きも蔭に廻はりて打消しかたゞ一座が蓬萊觀に興行せることは殆んど土地の人に知られずして隨つて是まで見しことなき不入りにして到底收支償ふの見込み立ち難かりしより僅かに三日間にして同地を打上げ行橋に赴きたり然るに先に相談纏らずして手を引きし中津の興行元はこの三日間の興行にて呂昇の伎倆を知りこれならばどの思惑十分に立ちたれば直ちに一座の後を追ふて行橋に赴き實は中津には先年越路今の太椽や大隅の一座來り土地の人は耳が肥え居れば呂昇の名は豫て聞き居れどもタカが女義太夫の事ゆゑ如何あらんかと思ひ先の日の御相談にも乘氣せざりしが愈實地を聞きて確かに見込み立ちたり就ては今一度是非來てくれとて

たつて請求したるに呂昇は九州に足を入れてより到る處成功
 したるに獨り中津にのみ失敗したるは何かの因縁なるべく一
 たび失敗せし處に再び足を入れるは甚た快よからざる事に
 て又もしも再度の失敗を重ねるが如きことありては面目にも
 關すればこそ固く辞退したれども先方の懇請黙し難き節もあ
 り餘儀なく之に應じて行橋より直方飯塚の興行を終りて後
 津に引返へし同トく蓬萊觀において再度の興行を始めたり此
 度は廣告も行届き又不入りながらも前回の三日間に於て評判
 立ち居りし際なれば前回とは打て變りし盛況を呈し左しも宏
 大なる大劇場も毎夜酢詰の大入りにて最初十日間の約束なり
 しものが日延べに日延べして遂に二十日間の長きにわたり同
 劇場が斯かる大入りを見しは新築以來攝津大椽一座の時と前

後二回なりしといふ

呂昇は博多に興行中同地の文人墨客の愛顧を蒙り若しも中津
 にゆかば有名なる耶馬溪に遊べとのことを勧められ居りしゆ
 ゑ一日末虎と共に只二人四里の行程を腕車にて耶馬溪に遊び
 たり名にし負ふ天下の絶景も女性には左程までの感興を興ふ
 るこそ能はざりしが獨り羊腸たる溪谷を削りて人工の奇を盡
 せりといふ羅漢寺に到りては兩人共に無限の興を催し案内の
 小僧に導かれて隈なく參拜を遂げしに同寺の住職にてもあり
 しか一人の老僧兩人の容姿の最も優艶にして斯かる山深き
 處には稀に見るの人柄なりしより頻りに訝かりて一室に招ト
 茶菓を羞めなぞして其の何れより來りしかを尋ねしに兩人は
 只大阪より下りし藝人なる旨を答へしに老僧はさては此頃中

津にて評判高き呂昇なるかごていたく歡待し御身達は一概に
 藝人とこそ云はるれ勸善懲惡を説くの職掌柄にして謂はゞ濟
 世の事に従事し居る人といひても可なるが斯かる靈地にさる
 名ある藝人の參拜すること佛も感應ましますべし左りながら
 藝人には惜しき容姿をもたれ定めし世の浮きたる若者どもあ
 らぬ迷ひに苦しめらるゝが多かるべしイテ拙老が案内して罪
 を作れば此通りなる事を示すべしとて自から先に立ちて同寺
 の有名なる地獄極樂の洞窟に案内したり犯せる罪はなき兩人
 ながらも黒暗々たる洞窟に入りて件の老僧より地獄の状は斯
 くく々々物凄き有様を説示されし時は流石に身の毛をたて
 て震ひあがり中津に歸るまを車の上に念佛を唱へつゞけ今も
 尙は當時の状を人に語りて罪惡の恐ろしきを戒め居るとの事

なるが流石は女性の優しき心さまといふべし
 中津の儒者にして書家の聞え高き戸早春村翁一夕蓬萊觀に遊
 びて彼女の先代萩を聴き感嘆措かず女流にも斯かる名人ある
 かとて一日彼女を自宅に招きたりしに偶々韓客黃鐵氏中津に
 悠遊しつゝありて翁を訪ね三人鼎座して雑談に時を移したり
 し翁は彼女が女性ながらも一個の見識を有し且つよく時世
 にも通じて藝談の外大に語るに足るを知るに至りてますます
 其の非凡なるに感し席上絹をのべてこは往年大阪に遊び高津
 神社に詣でし時に賦せる一律なるが御身は大阪の人なれば紀
 念のため贈らんとて一詩を書して同女に與へたりと、その時韓
 客黃鐵氏また筆をとりて

千秋雅調遙相接

一曲清微最可聽

呂昇君雅屬

朝鮮逸士 黃 鐵

の句を書して贈與し更に彼女に紀念のためなればとて揮毫を
 請ひ彼女の拙筆なればとて固辞するを聽かず遂に「壽」の一字を
 書せしめ永く賞愛せんとして持歸りたりといふ
 長崎に興行せし時同港居留の外國人その名を傳へ聞きて入場
 するもの多く素より彼等が淨瑠璃を解せん筈なきに而かも入
 場者は日増しに増加したりとのことなるがこは好奇心にから
 れて聽くよりも太夫を觀んが爲め來りしものならんも美妙な
 る三味線につれし流麗なる聲音も解らぬながら彼等の耳を喜
 ばしめしが爲めに相違なく何種の演藝にまれ斯くも外國人を

呼びしことは從來に例を見ざりし由にて興行主は不思議の感
 に打たれしとこのことなるが之も彼女の天稟の美聲が趣味を解
 せざる耳にも音樂の夫の如くに感興を與へし爲なるべし
 中津を打上げし後若松にて十日間興行し此地も大入をらめて
 愈九州を去ることとなりしが一座は始めての旅稼ぎに十分成
 功し一同喜び勇んで尙ほ前途の多幸ならんことを祈りしが
 大阪を出でしより早くも半年以上を経過し武骨とばかり聞き
 し同地方も人情風俗なかくに優しき處ありて而かも到る處
 温かき同情を以て迎へられ何となく居心よかりしより今や此
 地を去らんとするに及びては流石に名残り惜まれて遠からぬ
 うち再度の渡來を期しつゝ若松より瀛船に搭トて馬關に出で
 夫より中國廻はりをなしたり

九州を去りし後一座は中國を巡行することとなり先づ馬關に至り辨天座にて十日間興行し夫より廣島尾の道岡山姫路を短きも十日間長きは二十日間も興行して各地共九州に劣らぬ好評を博し後ち神戸に乗込みたり同地にては十五日間興行し夫より歸阪する筈なりしが偶ま土佐の高知より招聘に接したり一座が大坂を出でしより此時は既に九ヶ月を経過し九州中國共に意想外の結果を得始めての旅稼ぎに斯かる成功を見んことは始めより豫想もせずまた容易に得難き事なれば座員は勿論大夫元も勇み立ちて十分満足はなし居るもの、九ヶ月の長日月を見も知らぬ旅に暮せしこととて此間苦しむことも悲しいことも多々あり況して女性の故郷戀しき念は一入はにて最

早神戸限りにて久方ぶり錦を飾りて大坂に歸らんもの一同喜び居りし際なれば高知行きと聞きて一方ならず失望し流石の呂昇も泣きつ口説きつする部下の一同を慰めかねたりしが商賈柄是非なくも遂に同地の招聘に應ずることとなり神戸を打上げし後直に便船に搭して同地に乘込みたり此時生憎海上風波荒く一座悉く半死半生の大病人となりしが幸に別段の故障なく高知に上陸し高知座にて開演したり此時も人氣は他の各地に劣らされども時恰も梅雨の候に入り降雨勝ちにて僅か七日間の約束なりしものが二十日間餘も逗留しすべて地方にては降雨の日は諸興行物とも休業するを例とせり尙ほ且つ季節柄三味線の皮離剥し一時は一挺の三味線を全員にて代る代る使用せしが如きことありてかたゝ一同の勇氣は挫け歸心

は矢の如く降り續く雨は懷郷の涙を誘ひ連日悄然として大阪の空を眺むること二十餘日なりしが漸くにして約束の興行を濟し殆んど十月目にて懷かしき大阪に歸りたり

其十四 初度の東京行

呂昇は其の後多くは大阪にありて市内各所の寄席または劇場において興行し此間京都に神戸に奈良に堺に和歌山その他に出興行をなせしことありしが名聲ますます揚りて此頃より呂昇に對しては女義太夫てふ輕蔑の語は全く除去せられ藝人として大家の一人に加へらるゝに至りたり

斯くて一年半餘の後東京行の交渉纏り一座はいよいよ花の都の帝都に第二の成功を遂ぐべき運命に遭遇し暫しが間のお名残として稻荷文樂座に興行したるが此時は平素の顧客はいづ

れも同女が帝都に花を飾るの首途を祝せんためか常にも増して繁昌し七日間の御名残興行は連夜札止の好況なりしと

東京行に就ては呂昇は一方ならず痛心したるがそは只東京の名に恐れたるものにして若しも此行にして失敗せしならば再び大阪の土を踏まず故郷の名古屋に引退せん覺悟をなす文樂座におけるお名残り興行はほんの暫しのお名残りながら當人の胸中にては或は之が眞のお名残りとなるやも知れずとして此時は畢生の力を絞り又師匠を始め平素愛顧を受けし人々にも余所ながら永の暇乞ひをなす愈出發の期日確定してよりは何となく悄然として浮立たず梅田驛を發せし時には人知れぬ涙に袖を絞りしといふ思ふに大阪に於ては既に女ながらも名家の班に列し九州中國にも成功して赫々の名譽を荷ひつゝあ

るに獨り東京行について斯くも胸を痛めしはよくく東京を
エライ處と信ト淨瑠璃も自身の伎倆にては市人の人氣に投ず
るや否やを憂ひしものなるべし然るにこは東京の義太夫界を
知らざるが爲め全く買ひ被りたるものにて愈乘込んで見れば
案ずるよりは産むが安く其の結果は以下記すが如く九州にも
勝りし成功を見たり

一座が東京に乗込みしは明治三十一年の八月二十九日にして
九月一日より日本橋の薬師宮松亭に興行を始めたり此時一座
の顔觸れは呂昇末虎廣勝小彌儀播駒今の喜昇昇壽死亡昇花死
亡小昇廢業花子廢業の九名にして初日の語物は呂昇寺子屋末
虎大文字屋廣勝日吉丸三なりしが廣勝の流麗なる語口に次で
末虎の隱健なる語口は非常の好評を得更に呂昇の寺子屋に至

りては場内破れんばかりの喝采を博したりしが夫もその筈女
義太夫にして寺子屋といへば多くは僅か一くさりのサワリに
重きを置き肝腎の首の處は殆んど度外視せるの觀あるに反し
呂昇の語ることの巧者にして更に唄ふことに湛能なる全段中
少しも抜く處なく而かも些のダレもタルミもなく客をして息
をもつぐ能はざらしむる例の語口の上に艶麗なる容姿は端嚴
なる姿勢と相俟つて始めより終りまで乱れず崩れず殊に松王
の泣笑ひに至りては斯道の絶技と稱せらるゝ師の呂太夫の直
傳にして平素東京一流の女義太夫の耳に慣れ居る東京の義太
夫聴きは意外の感に打たれざるを得ざりとなり
此の如くにして呂昇の名聲は忽ちにして四方に傳はり殆んど
連夜札止の盛況を呈して同亭を打上げそれより京橋の東橋亭

兩國の新柳亭本郷の若竹本石町の橘亭四谷の喜よし亭芝の琴平亭等に興行し若竹には更に回を重ね前後四ヶ月間各席とも大入りを見ざりしことは一夜もなかりしといふ

其十五 東京に於る雜事

大阪上りの呂昇の名は早くも嗜好者の仲間に傳はり其の以前攝津大椽が始めて師の吉兵衛に伴はれて上京し満都の人氣を一身に集めし時にも劣らぬほどの人氣を博せしが茲に一言すべきは呂昇に對する此人氣は夫の空前の人氣を得し初代綾之助に對する一部ドウスル連の人氣にはあらずして眞に淨瑠璃を好む人の人氣を得し事これなり左れば東京に於ては女義太夫の客といへば殆んどドウスル連に限られ居るが如き傾きあるにも拘はらず呂昇一座の客は大に之と趣を異にし淨瑠璃を

聽くが爲めに來る者のみにして隨つて客筋は普通の女義太夫席の夫とは全く異なりとなり

舊久留米藩主有馬伯爵呂昇の盛名を聞き一日橋場の邸に召して先代萩を語らしめしに伯は嘆賞措かず其の後兩度有栖川宮御息所を始め親戚又は出入りの人々を招き岸姫松と中將姫とを語らしめ又慰みにとて蓄音機にも入れしめたるが後室韶子の方またその艶麗なる語口を激賞し紀念のためにて短冊に左の和歌を書いて贈與したりと

豊竹呂昇によみておくる 韶子

くれ竹のよにぬけ出て立のほる

ふしとしらべも聞えけるかな

尙この短冊を呂昇の許に送り來りしとき家扶より左の書面を

添へありしと

此の短冊は我有馬家御後室韶子の方の御詠にして豊竹呂昇の義太夫を聞し召され御感の餘りものして賜はる者なり
後室は有栖川宮家の姫君にして御維新前有馬家へ御入輿あらせられ和歌文章には殊に秀でさせられたる御方なり
御年は古稀より三ツ四ツ御越し被遊候穴賢

明治三十二年十又一月日

東京橋場有馬邸に於てしるす

清香武藤印

尙伯爵もまた自から筆をとり左の一句を揮毫して同女に贈りたりと

嬌鶯弄嬌聲

重堂書

呂昇が有馬邸に招かれたること傳はるや紳士紳商にして淨瑠璃を嗜む者同女を自宅に招き親戚知己を集めて其の嬌喉を聴き一時は流行となりて彼女は之が爲に多忙を極めたりと
娘景清の日向島は彼女があらふる語物中最も苦心したるものにて始めは故團平につき次で故豊澤廣助につき四年間稽古を積み夫の謠の一節にも三ヶ月間謠曲専門の師の許に通ひて研鑽し滿四年の後始めて師の廣助より最早吾手を離すも差支なからずと云はれしものにて彼女は爾來自修は怠らざるもの、師の言を守りて絶て場に上せしことなかりしが琴平亭に出勤せし時席主より強て所望され師の言には背くもの、實は四年間の苦心を空しく包藏するを内心遺憾に思ひ居りし折柄なれば

勸めらるゝがまゝ、試みに語りしに非常の喝采を博し都下の諸新聞また嘖々として賞揚し端なくも呂昇の日向島は一の呼物となりて爾來各席に於て所望に應じ前後五六回も語りしこいふ尤も日向島は東京に於ての外は師の言を守り今も尚ほ大事をとりて場の上せしことなく人は寶の持腐りなりとて之を惜み居るとぞ

故綾瀨太夫彼女を評して左の如く云ひたりといふ

淨瑠璃は語る上に唄ふ處なかるべからず一方に語りて情感に訴へ一方に唄ひて聽覺に訴へてこそ客は十分の感興を催すものなるが今の太夫の多くは兎角一方に偏し語るに巧みなるものは唄ふに拙なく又唄ふに上手なるものは語るに下手にして此兩者を兼ね居るものは當代に於ては越路太夫(今

の攝津大椽の外求むべからざるが呂昇の語り鹽梅を見るに同女は確かに語る上に唄ふこと即ち淨瑠璃を語るの術を會得し居るものゝ如くにして幾多の男太夫中にも夫の聲ありて其の術を知ること彼女の如きは恐らく少なかるべし只若年なるが爲めすべての語口に於て固まらざる處あるも今後數年も経ちて習熟するに至らば越路太夫(攝津大椽)に近き語手となるべし云々

東京に赴くの前彼女は東京には墮落書生のトウスル連なるものありて女義太夫を苦むること非常なるものあり若しこの連中に見込まれなば辛き目を見るのみならず一座の名譽にも關すれば飽くまで品位を重んじて彼等の執着を避くること心掛くべしとの事を注意され居りしゆゑ彼女は座員を訓戒し

夫の東京に於ける女太夫の如き場當りをなすが如きは絶体に禁止し飽くまで品位を保つことに注意し故らに彼等ドウスル連の掛聲を外すが如きことをなす寧ろ素氣なく彼等に當りしため流石のドウスル連も此一座には殆んど手を着くこと能はずして都保美連は其の名の如く未だ開かざる蕾なれば花として眺むべからずとして空しく指を唾へたりとす

其十六

東海道を經久方ぶり故郷に錦を飾る

東京に足を入れてより滿四ヶ月間到處非常の喝采を以て迎へられ剩さへ貴顯紳士の愛顧を受くること一方ならずして當初大阪を出發せし際の杞憂と危懼は今や満足と喜悅とに化し十二月三十日最後の若竹亭を打上げその翌日横濱に出で三十二年一月一日より同市喜久の亭に於て興行を始め二十日間興

行の後同市を打上げ靜岡に乗込みそれより濱松豊橋を經二月中旬久方ぶりにて故郷の名古屋に歸りたり

回顧すれば曾て呂太夫に伴はれて大阪に出でしは八年前にして當時は技藝の未熟なりしは云ふまでもなく世間知らずの一少女なりしが爾來この社會の師匠に對する弟子の常として具さに世の辛酸を嘗め尙且つ其の技を磨くの上にては人知らぬ涙を絞りしこと幾回なるを知らざりしが漸くにして名聲次第に揚がり九州に中國に東京に首尾よく成功し錦を衣て故郷に歸りし身は只わけもなく愉快が先たちて恩師の土佐太夫を始め親戚知己を訪ひつ訪はれつ過ぎし方の物語りに二三日を夢の間に過したりし同市の興行場は千歳座にして舊正月元日を以て蓋をあけたり

郷里のことなり且つは遊藝に熱心なる土地柄たけ斯くも名を揚げし藝人を出したるを名譽とせる此道の人々は開業前より縁故ある者となきものとの差別なく種々心をこめて人氣を立つること力に致したれば其の前景氣の盛んなること殆んど譬ふるにもなく愈開業となりては毎夜錐を立つる餘地もなき大入りにて滿二ヶ月間打續けたり

名古屋の女義太夫に豊竹駒吉といふものあり此時は既に死亡し居りしが其の以前同地方にては相當に名をうりし者なるが呂昇は名古屋に在りし時先輩として敬慕しまた興行に一座せし事もありて淺からぬ縁故ありしゆゑ同地の女義太夫の誰彼は呂昇の來りしを幸ひ駒吉の追善淨瑠璃會を催すことと場所をも音羽座に定め呂昇にも出演の承諾を得その旨披露し、さ

て愈開催となり出勤の順番も定まりしに千歳座の興行元斯くと聞きて故障を入れ呂昇の之に出勤するに對し異議を唱へ聊か紛紜を生じたりしが其のうち同女の出番となりしも此事解決せざるより止むを得ず會主は折角披露までしたれども呂昇は餘儀なき事情のため出席し難き旨を述べて聽衆に挨拶せしに聽衆はイツカナ聽入れず呂昇を聴くが爲めに來りしものを此儘にては歸らトとて滿場激昂甚たしく如何なる珍事を生せんも計り難き形勢となりしより會主の狼狽一方ならず再三急使を千歳座の興行元に馳せて哀請し漸くにして其の承諾を得急遽の場合なりしゆゑ呂昇は肩衣を着くるの暇なく着流しのまゝ見臺に向ひて三勝酒屋を語り斯くて辛ふトて一時の騒動を鎮め得たりこの事なり尙ほ彼女は滞在中亡父の法要を營み

追善のため貧民千五百名に金品を施與と同時に愛知孤兒院にも寄附金をなしたりといふ
名古屋を打上げて後一座は岐阜に赴きて一週間の興行をすま
し夫より京都に入り二十日間興行し此たびは八ヶ月にして三
月二十八日大阪に歸りたり

其十七 文明館の興行——附呂昇と南地

之より先き呂昇が播重を去りて同席と關係を絶つに至るや豫
て播重がかくも人氣ある太夫を抱へ多くの利益を得つゝある
を羨望せし他の興行主は其の定席として寄席を新築すべけれ
ば是非南地に於て獨立の旗を揚げ播重の向ふを張るべしと種
種勸誘したり然るに呂昇は此時は一種の厭世觀より名古屋に
引退せんかこの考へを起し且つ播重を去りて直ちに南地に獨

立の旗を翻へしその向ふを張るが如きはヨシ今は何等の關係
なしとするも五年間手を携へし情誼に於て忍ぶ能はざればと
て之を謝絶し次で北地の萬亭に打つて出づること内定せし
時も件の興行主は顔馴染少なき北地に於てするよりも矢張り
今日の名を得し根據地の南地に於てする方利益なるべしとて
手をかへ品を變へさまざまに誘致したれども呂昇は義を重ん
トて之に應せず爾來道頓堀の劇場または演舞場等には出演し
たることあれども寄席へは播重に對する義理より決して興行
せしことなかりし
然るに三十二年二三の人々資を醸出して千日前に壯麗なる寄
席を新築し文明館と命名し今の春木亭同年三月に至り落成を
告げたるが開場の初興行には人氣あるものを入れんとて誰か

彼かと詮議中恰かも呂昇が多大の名譽を荷ひて東京より歸來したれば直ちに同女に交渉して開場を爲すこととしたり呂昇も既に此時は播重と關係を絶ちてより三ヶ年餘を経過し居れば義に於て欠ぐる處なかるべしと相談容易く纏りて一座は同年の四月一日より文明館において興行を始めたり何がさて久しく大阪を遠ざかり顧客は一座を思ふの念切なりしが上に東京における成功と盛名は早くも傳はり居りし際なれば開場早々非常の歡迎を受け實は十日乃至十五日間位のほんの開場の興行を以て始めたりしに連夜の大入りに引かされ到頭百二十日間の長きに亘り八月三十一日を以て同亭を打上げ夫より再び四國中國九州の旅興行に赴きたり

其十八

再度の四國中國九州行——戀人を

失いて失戀の人となる

此度の西行も先づ九州に渡り前回同様大小の各市を巡行したるが各地とも前回に於て顔馴染が出来居れば一入ほの好況にして四ヶ月餘の後馬關に出で中國巡行の途につきたり馬關の興行中呂昇は意外なる出来事に遭遇したり、そは借老を契りし名古屋の戀人が病死せしとの報に接せしこと是なり、彼女の名古屋にありし時一たび人に嫁し一男一女を挙げしが故ありて離別し爾來再び良人に見えざりしが偶々意氣投合せし一男子あり、此人は名古屋の某良家の次男にして媒介する人あり聽て身を起して後結婚せんと約をなす其の期の至るを待ちつつありしが此間彼女は母親の外この戀を固く胸中に秘めて人に語らず二年の永の歲月獨り樂み獨り苦しみが畢生の

戀は今や敢なくも一朝にして泡沫に歸しこれより彼女は全く失戀の人となりたり而かも彼女は流石に二年越しの戀を忘れかね獨りひそかに亡き人の後を弔ひつゝ名古屋の空を眺めては悵然として世の無情を啣ちつゝ馬關長府の興行は夢心のうちに濟まし廣島尾の道岡山姫路さては四國の各地も浮かぬがちに興行を終り神戸を経七ヶ月目に大阪に歸りしが歸來直ちに事に託して獨り名古屋に赴き亡き戀人の墓前に懷舊の涙を濺ぎて未來の契りを祈りしといふ尙彼女に斯かる秘密のありとは何人も知るものなく彼女が平素の快活なるにも似ず馬關にて沈み勝ちに日を送りし時には一座の人々不思議には思ひたるも左る深き仔細ありとは想像たもせざりしといふ

其十九

失戀の後の呂昇

今暫らくにして戀人と結婚の望みを遂げ其の上は廢業する覺悟なれば自然この間は技を磨くに身の入らざるが如きものあり殊に地方興行に出かけ上は稽古せんにも師匠なければ單に自修に過ぎざりしが一朝戀人を失ひてよりは人生の樂みは全く彼女の腦裡より奪却せられ爾來は世の無情を憐むと同時に以前の決心に立歸りて愈藝人を以て世を終らんことに所存を堅めこれよりは稽古の便を失ふが爲めに多くは地方の興行を謝絶し三十四年の十月より十二月にかけ北國の招きに應じて金澤高岡富山を巡行せし外多くは大阪に在りて修業に餘念なく師の呂太夫は勿論津太夫彌太夫住太夫團平吉兵衛廣助等に就て専心習練しこの他仮令自分より劣技なりと知るも語物によりて及ばざる處ありと見れば如何なる若輩たりとも辞を

卑うして稽古を請ひ今日に至るも尙變ることなしとぞ

其二十 再度の東京行と東北地方巡行

三十八年その定席なる松屋町松の亭の正月興行を終りし後東京の聘に應つて再度の上京をなしたり此時の一座は末虎小彌儀喜昇當之助右昇等にしてこのたびは前回の寄席興行より一躍して新富座と東京座の兩大歌舞伎に興行し湧くが如き人氣を博して兩座を打上げ横濱に出で更に甲府宇都宮山形仙臺等東北の各地を巡行し歸途静岡濱松名古屋京都を経て八ヶ月の後大阪に歸りたりこの行も至る處に成功し甲府の如きは歸途にも立寄りて二回までも興行したりといふ由來東北地方の人は比較的演藝の趣味に乏しく就中淨瑠璃の如きは地方の人の餘りに耳に慣れざるが爲め是まで如何なる太夫も成功したる

ことなかりしが呂昇の語口ならば必ず人氣に投ずるならんと横濱の仕打某早くも目を着け冒險的に一座を率ゐて各地に打つて出でしに此見込みは首尾よく當りて寧ろ豫想外の結果を見たりと

其廿一

呂昇を呂昇とらしめし 土佐太夫と呂太夫

呂昇いかに天稟の藝才あればとて自然に放任せば磨かざる玉の光なきが如く今日の伎倆は得て望むべからざるべし畢竟彼女の藝才を看破し熱誠をこめて彼女を養成せし人ありたればこそ今日の呂昇となり得たりしものならん即ち名古屋に在りし時の師匠土佐太夫と大阪に出でし後の師匠呂太夫とは實に呂昇をして呂昇とらしめし人なるべし

竹本土佐太夫

土佐太夫の経歴を記するに先たち土佐太夫なる名義の系統に
ついて一言せんに抑も初代竹本土佐太夫といふは斯道の元祖
竹本義太夫の門人にして初め若竹政太夫と云ひしが義太夫の
没後その遺言によりて二代目義太夫となり後に播摩少椽とな
りし人の門弟二代目竹本政太夫の高弟にして政太夫なる名稱
は義太夫と共に四代目限りにて名義相續を許されざる事とな
りしにつき土佐太夫と名乗りしが後に宮家より播摩大椽の名
を賜はり文政年間に雷名を轟かせし人なり同人の没後門人其
の名跡を繼ぎて二代目三代目より四代目に至りしが此四代目
土佐太夫といふは大阪生魂に生れ本名を栗岡又兵衛と云ひ去
る三十三年九十七歳の高齢を以て京都に没したるが同人の退

隠と同時に今茲に記さんとする土佐太夫五代目として其の名
跡を相續したるものにて土佐太夫なる名前は淨瑠璃社會にお
いては最も重きを置かれ居るものなり

五代目土佐太夫は名古屋七間町に庭園の美を以て稱せられし
料亭丸惣事櫻井惣七の次男にして弘化四年に生れ當年六十歳
本名を櫻井惣兵衛と呼び幼年の頃は腕白を以て鳴り遊藝など
優しきもの心寄すべくも見ゑざりしが十七八歳の頃友人
に勧められて淨瑠璃の稽古を始めしに深くもその趣味を解し
豊澤玉三郎について暇ある毎に稽古をなすつゝありしうち偶
々初代大隅太夫と竹澤彌七の一座名古屋に至りしより兩人に
稽古を請ひその後若太夫清四郎春太夫吉兵衛山城椽初代三光
齋二代三光齋駒太夫等同地に至るごとに交り結びては稽古

を請ひ、また京都の人にて當時名人と呼ばれし津賀太夫、鶴澤友次郎等にも教を受け、次で四代目土佐太夫、綱太夫等について本職も及ばぬほどの熱心なる修業をなせしに、技大に進み、世間よりもやかましく囃したてらるゝに至りぬ。兎角するうち父は病没したるが、彼は父の業を繼ぐを厭ひ、料理業を廢め、舊名古屋藩主徳川侯の家老職渡邊家に仕へたりしが、この間は如何に好きなき道なりとはいへ、流石に兩刀の手前に對し、まさか、浄瑠璃を語り歩くわけにもゆかず、餘儀なく廢め居りしが、維新の後之を辭して再び浄瑠璃に凝り、爾來は専ら四代目土佐太夫について稽古を勵み居りしに、深く土佐太夫に愛せられ、本職となりし後は浪越太夫と名乗り居りしも、去る二十八年その名跡を繼いで五代目土佐太夫となり、今現に名古屋における因社の總取締をな

すと同時に總ての藝人の取締をもなすつゝあり、彼が始めて素人温習會に出演せしは十九歳の時にして三日太平記を語り、非常の喝采を博したりしが、當時は愛玉と名乗り居りしに、一たび公開の席に出でしより、愛玉の名は同好者間に喧傳せられ、これより彼は益天狗となり、夜を日についで唸り倒し、遂に附近に軒をならべ居る自家所有の借家連中より、毎夜安眠を妨げられ、迷惑至極なれば、浄瑠璃をやめてくれ、さもなれば一同轉居すべしとの申込を受け、流石の彼も之には閉口し、今悉く借家をあげられては、収入に大關係あれば、今後は決して浄瑠璃は語らざるゆる立退きは見合せてくれと詫入り、それより四五日間、は謹慎し居りしも、辛抱出來ず、遂には土藏の中に閉籠りて朝から晩まで唸り續けたりといふ、尙彼はその後、豊竹巴名太夫

また豊竹玉太夫と名乗りしも次で竹本浪越太夫と改めたるが浪越太夫の名最も世間に聞え居たりと彼は深く斯道の古實に通じ此点においては同業者の尊重する處にして近年は舞臺に遠ざかり専ら斯學の研究と門弟の養成とに努め居れるが抑も最初において呂昇を見出せしは此人にして呂昇が其の門弟となるに及びては獨り藝道のみならずその品性を教育する事にも心をよせ勸めて大阪に修業に出せし後處世の事その他何くれもなく訓戒し我子にも勝るの愛を注ぎ今日も尙變ることなしといふ

豊竹呂太夫

呂太夫は本名を上西吉兵衛といひ夫の名高き天満のはらく薬の發賣元はらく屋の次男なり天保十四年に生れ當年六十

四歳なるが同家の番頭に半七といふものあり至つて淨瑠璃氣狂ひにて竹本戸摩太夫について稽古をなし居りしが好きの道なれば遂には若旦那の吉兵衛に勸めて淨瑠璃を學ばしめたり吉兵衛も子供の時より半七の口癖のやうに之を口ずさむを聞慣れ多少の趣味を有したりければ勸めらるゝが儘に其の氣になり始めて鶴澤時三について三味線を習ひ次で斯道の篤實家として有名なりと鶴澤重造の門に入り一時は全く之に熱中し寒暑も風雨もあつたものにあらず夜の明くるをまちては天満の宅より豊後町の重造方に通ひたりしが彼は生得壯大なる音聲を有し淨瑠璃は太き聲ならざるべからずと云ひし當時には此上なき適當なる聲柄なりしより或日重造は夫程結構なる聲を持ちながら三味線に凝るは惜しきものなり語りの方こそ宜

じからんとて勸告する處ありしに吉兵衛も成程と感トそれよ
 りは専ら語りの方を稽古したり
 彼が始めて此道に這入りしは十八歳の時なりしが重造に學ぶ
 に及び士鳳と稱し二十一歳の時八軒屋の播權といふ宿屋に重
 造門下の素人温習會を催したる時始めて出演して大安寺を語
 りしに破るゝばかりの喝采を博し初陣としては十二分の成功
 を見たりこれより彼は愈大得意となり家業を抛ちてまでも稽
 古に熱中し其の後十三と共に素人ながらも古今の名人と稱せ
 られ今も尙ほ斯道の人に崇拜され居る呂篤を頭に一光齋千倉
 鱗勝好等と共に稚小松連なる素人連を組織し各所の温習會に
 出演し世評の喧しきにつれて當人はますます天狗となり今は
 家業も手につかず父兄親戚より屢意見を加へらるゝも之のみ

は止め難しとて斷然廢止するに至らず兎角するうちに親譲り
 の資産を蕩盡し營業を繼續する事能はざるに至りしより池田
 在の本家より實兄出で來りて營業を持續し折柄彼は呂篤死亡
 したるにつき其の後を繼いで二代目の呂篤となり斯くて名聲次
 第に揚がりしものから道頓堀竹田芝居の持主淺野常次郎本職
 となりて同芝居に出勤せんことを切に勧誘し三百圓の敷金を
 以て遂に相談纏り茲に彼は愈本職の太夫になるに至りたり
 當時三百圓の敷金といへば餘程の名家にあらざれば得難きも
 のなるに今呂篤が之を得しことは同業者の意外とする處にし
 てまた呂篤自身も吾にそれ丈けの伎倆あるかと自分ながらも
 案外の思ひをなしヨシそれたけの伎倆ありと認めらるゝなら
 ば一番本舞臺に登るも一興ならんと之も同人が藝人となるの

決心をなす一の動機とはなりしなり
 當時彼は三十歳の男盛りにして技藝益發達し聲望また次第に
 加はり居りしが本職となると同時に更めて古鞆太夫の門人と
 なり名を呂太夫と改め博勞町稻荷神社境内に文樂座の舞臺を
 其の儘借り來りて改名披露會を催し次で愈竹田芝居に登場し
 たりその時の一座の重なる顔觸れは古鞆巴織等にして呂太夫
 は御所櫻三を語りたりと
 かくて其の後は堀江座その他に出勤し又地方興行にも出でし
 が明治十七年文樂座が松島より現今の御靈社内に移りし時同
 座へ出勤する事となりたり此時の藝題は菅原の通しにて呂太
 夫は時平館を語りたり此種のものは同人の最も得意とする語
 物にして實は同人の爲めに特に之を入れしとの事なり爾後彼

は引續き文樂座に在りて此間同一座と共に東京を始め各地方
 を巡行したりしが三十五年病に罹り今日にては略ほ快復はし
 たるもの、健康舊の如くならず遂に退隱し今は靜かに老を養
 ひ居るといふ尙病を得るの前の語物は橋本にしてこれを名残
 りの語物なりしが橋本は彼が得意の語物の一なりとぞ

其世一

始めて呂昇を見出せし人

始めて呂昇を見出せし人は彼女が未だ名古屋に在りて淨瑠璃
 の稽古に取かゝりし時三味線を學びし野澤吉輔なり當時呂昇
 は十六歳にして名古屋第一流の料亭と藝妓屋とのある上長者
 町に住し吉輔について稽古をなせしが容貌もよく且つ美聲に
 もあり其の上才氣もありたれば某々料亭の主人はいづれも藝
 妓とならしめたき希望を抱き内々奔走しつゝありしに斯くと

聞きし吉輔はいたく苦々しき事に思ひ遂には彼女とそ行末立派なる太夫になるべき者にして彼が如き質のよき者は百人に一人もあるものでなしそれを藝妓にして朽ち果てしめんなどは如何にも残念千萬なればとて裏に廻はりて百方奔走し遂に彼等料亭の主人をしてこの念慮を思ひ止らしめたりと次に愈藝人とならんとし又藝人となるに及びて彼女を見出し満腔の熱誠を以て教訓せしは前記の土佐太夫と呂太夫となるが更に女義太夫風情がとして一言の下に擯斥せられし際にいて同女を見出しこれを世に紹介したる人は大阪朝日新聞記者故本吉欠伸氏なり氏一夕播重に呂昇一座を聴きて其の非凡の技に驚き爾來屢ば聴きて深く彼女の藝才を愛しこれを朝日新聞紙上に掲げて同好者に紹介し次で共樂會の幹事貫名駿一

氏に同會出演者の一人に加へんことを勸告したるに當時貫名氏も女義太夫を認めざりし人なりしが本吉氏に誘はれこれを聴きていたく感心し斯くて共樂會出演者とするに至りしこと、是亦前に記載せしが如し要するに呂昇の早く世に出でし動機は本吉氏と貫名氏が之を上流社會に紹介せしが爲めにして彼女も常に之を徳とし兩氏を恩人として敬慕しつゝありといふ尙貫名氏は獨り彼女に世に出づるの動機を與へしのみならず延て從來社會の下層面に埋没せられし女義太夫に向上の機會を與へ以て今日の位置を得せしむるに至り一般の女太夫界の功勞者としてまた恩人として彼等一般よりも至大の尊敬を受けつゝありとの事なり貫名氏の談に曰く

呂昇が今日の呂昇となるに至りしは師の力にもよれど其の

重なるものは始終一貫の勉強力と彼女をして此勉強を續けしめし母親の助力とに依れるものなり彼女の母親は實に男勝りの女丈夫にして愈娘を藝人となさんとするに及びてはあらゆる方法と手段とを以て獎勵鼓舞し今日こそ相當の待遇を受け居るものゝ以前は女太夫の収入は實に憐れなるものにして一家を經營するの傍ら多くの良師に教へを受くるが如き事は財力の許さざる處なるに呂昇は大阪に出でし後は呂太夫は勿論彌津住等の太夫を始め團平廣助松葉屋吉兵衛廣助(當今の)等常に四五名の良師につき修練を怠らざりしがこは尠なからざる費用を要するものなるに母親は彼女をして絶て内願の憂あらしめず彼女をして稽古に身を委ねしめたり斯くも多數の良師について稽古をなすが如き事は女

太夫には全く例なきことにして呂昇の今日に至りしは一面に於て實母に負ふ處ありと謂ふべし彼女が播重を去りし後實は女義太夫にも是程のものあるからには何とかして之を世に出し換言すれば中流以上の社會に紹介し之を標本として女義太夫の革新を行ひ其の位置を高めしめたく思ひ同好者と共に別に一座を組織せしめ都保美連と命名し北地の萬亭に於て興行せしめたり故照玉は當時女義太夫界の大立者として相當の人氣を有しまた其の伎倆に於ても却々に立派なるものあり銚々たる一流の男太夫も嘆賞措かざりし程なるが一座の眞打には此照玉を裾へ次に呂昇末虎愛之助都小彌儀などの顔觸れとしたるが元來都保美連を組織せし目的は前記の如くにして此目的を達せん

には彼等をして其の品位を保ち得るだけの待遇を與へざるべからず、從來女義太夫が世間に信用なきは一に品位を保ち得ざるが爲めにしてまた之を保ち得ざるは収入の之に伴はざるが爲めなれば先づ第一着に彼等の待遇法を改むることとし、興行主に説きて當時にとりては文樂始め其他大一座の太夫の夫に比し權衡のとれざる程多額の給料を與へ技藝を研くと共に風紀の矯正に嚴格なる制裁を加へしむる事としたるが幸にして此目的は漸次に遂げられんとし、今日にては都保美連は女義太夫界の唯一の標本となるに至りたり、藝術における呂昇の伎倆は世既に定評あり、今更これを説くの必要はあらざるが、彼女はまた頗る斯道の研究に忠實なるものあり、院本には往々文章の解し難き處ありて多くの太夫

は譯解らずに盲ら語りを爲しつゝあるは一般の状態なるが、彼女は教育ある人の面前に於て此盲ら語りを爲すをいたく恥かしき事に思ひ、近來は力めて身分ある人に接近し、何かについて教へを受けんことを心掛け、淨瑠璃の文章の解し難き處なきは毫も恥ることなく、一々質問し、また其の希望として、少くとも都保美連たけにても一同共同して文學者につき、淨瑠璃の講義を聽かんとし、その方法を講じ居るとの事なり、こは誠に殊勝の心掛けにして、斯道のため何とかして此希望を達せしめたく思ひ居れり云々

其廿三

都保美連と目今の一座

都保美連組織の次第は前に記せし通りなるが、當時一般に藝人社會の風儀今日の如くならず、動もすれば善からぬ噂を立てら

るゝが如き事もあり別けて女義太夫社會は一入は世人に注目され居りしより彼女は常に之を齒痒く思ひ居りしが幸に貫名氏等の盡力により獨立して一座を組織したれば此上は獨り技藝に關する事のみならず風儀を高め品性を養ひ少なくとも女義太夫界に一頭地を抜かんことを期し一の規約を設けて之を勵行し今日も尙ほ變ることなしといふ規約の全文は左の如し

都保美連規約

都保美連は讀んで字の如く都ての美はしき風儀を保ちつとめて惡弊を去り惡風を矯め各自その品性を高尚優美にせんことを期し且つ斯道の發達を圖るを旨とし左の規約を設けたり都保美連に入らんとするものは先づ確くこの規約を守ることとを要す

第一 各自親睦を旨とし禮義を重んじ品行を慎み先進者を尊敬し後進者を愛撫して互に扶持すべし

第二 藝道を勵み常に良師を選びて習練に身を入れ師匠の命に違ひまたは先輩の言に背くが如きことあるべからず

第三 興行中は當日の語物を必ず復習しまた高座に臨みては姿勢を正し一意専心となり決して他事を思ふべからず

第四 顧客に招かれたる時は禮儀をたゞし謙讓を主とし

第五 他人の藝術を批評しまたは素行を是非するが如き

ことは最も慎むべし

第六 風儀を高尙ならしむるため日常にても外出の際は必ず髪を櫛り衣紋を正し假りにも前垂を用ふる等の野卑なる風俗をなすべからず

第七 この規約に違背したるものは都保美連より除名し尙甚たしきものは因社に申告して相當の處分を求むべし

都保美連

尙都保美連組織當時より今日までの間には座員中死亡せしものもあり亦廢業せしものもありて多少異動し居れるが目今の重なる座員は左の如し

- 豊竹 呂昇 竹本 末虎 竹本 小彌儀
 - 豊竹 喜昇 豊竹 源昇 豊竹 右昇
- (以下略)

其廿四 都保美連の重鎮竹本末虎

竹本末虎は都保美連組織當時より今日まで同連の重鎮として至大の人氣と勢力とを有し一座の貫目をして一段の重きを加へしめ居れり、一体貫目なるものは強いて附加へんとしても出来るものにあらずして之は自然に俟つより外なきものなり今日でこそ呂昇は一座の座長としての貫目十分に備はりたれ二三年前までは容貌の優美なるが爲めに年齢よりは若く見へ之が聊か貫目を殺ぐの嫌ひありて女義太夫の標本とせらるゝ大一座の代表者としては所謂玉に瑕の憾みなきにもあらざりしが幸にも末虎のあるありて照玉死亡の後も都保美連をして優に大一座の資格を亡失せしめざるを得せしめたり末虎は本名を桃村とら子といひ大阪堀江に生る父は材木商を

業とせしが平素遊藝を好むものから娘は是非とも藝人になさんとし、或夜の晩酌の時に可憐なる愛兒を膝にのせつゝお前は
 何になるかと問ひしに無邪氣なるどら子は妾は義太夫になる
 と答へしより父はいたく之を喜び女太夫となすべく決心して
 同女が十一歳の時竹本鐘太夫に託して本式に稽古をなさしめ
 たり、どら子の母親も亦大の淨瑠璃好きにて毎日どら子を伴ひ
 て鐘太夫の許に通ひ何でも善き太夫にせんとて頻りに奨励し
 十二歳の時始めて舞臺に出たり丸ボチヤの色白き可憐なる
 小女が割合に太き聲を出して巧者に語りこなす處却々の人氣
 を呼び、それよりは引續き舞臺に出で十四歳の時湊琴の一座に
 加はりて旅興行に出で岡山廣島等中國を巡行し十六歳の時稻
 荷東門の女太夫定席における照玉一座の人形入に加はりて二

年間勤續し、次で九州興行に出かけ小倉博多久留米熊本等の各
 地を巡行したり
 之より先さら子は師の鐘太夫より鐘虎の名前を貰ひ照玉一座
 に加はりし時より鐘虎の名は漸く嗜好者仲間に喧傳せられ人
 氣次第に加はりしが十八歳の時師の鐘太夫死亡したるよりそ
 の後は専ら豊澤光末に學び二十一歳の時今の末虎に改めたり
 斯くて引續き各所の席亭に勤續し聲名漸く加はりしうち人に
 嫁し一家の主婦となるに及びて廢業し前後七年の間全く三味
 線を手いせざりしが三十三歳の時良人に死別れたり、其の後折
 角それ程の伎倆を有しながら素人に終るは惜しとて種々勸告
 するものありて再び斯界に花を咲かすに至り爾來引續き今日
 に至れり

未虎の幼少の頃の女太夫は肩衣を着ることなく多くは紋付姿なりしが其の後ほつく肩衣を着ること流行し彼女も照玉一座に加はりし時より肩衣を用ふるに至りたり同女の高座における姿勢は如何にも立派にして貫目あり位品あり始終落付拂ひ毫も姿態を乱さず而かも綽々として餘裕ある處申分なき語振りにしてこれが都保美連の一座を大ならむるに非常の助けをなせり而して未虎の肩衣姿の立派なる事は以前より群を抜き居りしと見へ顧客は常に之を愛で、肩衣を贈り見臺に向ひし未虎の姿勢は今も尚ほ仲間の摸範とする處なりといふ

彼女は大き聲を出すべく養成せられしを以て其の語物は呂昇の語物とは全く撰を異にし飽くまで地味にして飽くまで貫目の

ある語口は彼女の身上とする處にして夫の油屋赤垣出立帶屋などはその上乘なるものなり尚彼女は都保美連に入りてより常に呂昇を助けて座員の品位を保つ事に努め後進の部下を愛撫しては技藝の練磨を奨励し一座が今日の重きをなせるもの未虎の力與つて多きに居るといふ彼女は當年四十三歳にして先年娘に養子を迎へ商業を営ましめ孫をも擧げて温かき家庭をつくり居るといふ

其廿五 因社の再興と呂昇

女太夫仲間にも以前より因社の設けありて規約を定め集會をも催して斯道の發達に資する處ありしが中途にして消滅に歸し再び之を起さんとする者なかりしが呂昇は之を遺憾に思ひ或時彌太夫の許に稽古に赴きし時三味線彈の豊澤小團二來合

せ居り偶々因社のこと話題に上りたるが其の時呂昇は茲處ぞ
 よき機會なりとて豫ての宿望たりと因社再興の事を彌太夫に
 訴へ熱心に其の助力を請ひしに彌太夫もその志に感トそは結
 構のことなれば一臂の力を添ゆべしとて同人より更めて照玉
 に説き此間呂昇は蔭にありて種々に奔走し其の結果照玉の名
 前にて重立ちたる女太夫に因社再興の趣意書を配り一二回集
 會を催し協議の末愈再興することに決し新九に規約をも制定
 して其の成立を告げたり此時は恰も明治三十年なりし尙呂昇
 は集會の時に衣服を着飾るが如きことありては自然一種の惡
 風出で是等のことより又もや廢絶に歸するが如きことありて
 は折角の再興もその効なれば集會の時は必ず綿服に限るこ
 とすべしと唱へ一同の賛成を得これらも規約の一に加へ爲め

に女流の藝人の晴れの集會としては極めて質素にして且つ眞
 面目なる會議を爲し得るよし今三十九年に改撰せし同社の役
 員は左の如し

後見

竹本名瑠吉

竹本末虎

古老

竹本鶴淺

竹本房吉

竹本長廣

豊竹呂昇

竹本越之助

豊竹八重玉

竹本東廣

竹本登久松

竹本東技

竹本彌調

竹本團治

中老

竹本房子

竹本小彌儀

竹本彌太廣

竹本廣春

豊竹此助

竹本綱巴津

豊竹喜昇

竹本七五三之助

竹本伊達之助

竹本當昇

古 老

豊竹 小巴

豊竹 東馬鶴

竹本文 玉

幹 事

竹本 末虎

竹本 鶴淺

豊竹 小巴

竹本文 玉

竹本 越之助

竹本 東廣

竹本 東技

竹本 彌調

其廿六

攝津大椽と呂昇

呂昇の語口は徹頭徹尾攝津大椽式なり第一其の音聲の艶麗豊
 富なる点に於て第二其の艶麗豊富なる音聲を自由自在に使ひ
 こなす点に於て第三其の語口の綺麗にして明晰なる点に於て
 共に全く趣きを同ふしまた其の筋も型も悉く純然たる大椽式
 なり、それも其の筈彼女は直接大椽について學びし事をなけ
 れ親しく彼について學びし以上の事をなせり大椽が彼女につ

いて人に語りし談話はこの次第を十分に説明し盡せり曰く
 呂昇は誠に心懸のよい感心な女です彼女は元來呂太夫の弟
 子ですから私は一度も稽古をしてやつた事はありませんが
 私の語口をすつかり取つて了つて居ります而かも私が苦心
 慘憺の末之ならばと自から信じて舞臺に上つたものを私は
 知らぬ間に呂昇に取られてしまつたのです弟子に稽古をし
 てやるのは只その語物の格を教へてやるので差向ひで舞臺
 に出すやうな事を教へてやるものではありません私はど
 んなもので舞臺に上す迄には種々工夫研究し自身を十分
 に信ずる處があるに至つて始めて語りますので私が文樂を
 語りますものは一として苦心慘憺の餘になつて居らぬもの
 はないのです處が呂昇は何時でも文樂の興行ごとに毎日本

を以て通ひ眞に稽古をする積りで聞きに來ますあれだけ力の出來て居るものが其の積りで興行たひに毎日熱心に通ふに於てはそれは必ず出來るのです私も随分澤山な弟子を仕込みましたが何れも自宅で差向ひにしてやる稽古に満足し私の粹をあつめた舞臺に上るものを其の積りで聞くものは一人もありませんですから皆その格は出來まして私の語口の心髓を會得して居るものは一人もありませんので眞に私の心血を絞つた語口を十分に腹に入れて其の語口を爲すものは呂昇の外には一人もありません私も一時彼女には稽古をしてやつて見たい氣がしました最早今日では其の必要はありません兎に角彼女は非凡な處がありましてもうあんな者は容易に出來ますまい

然り大椽の語口を尙且つその精髓を其の儘に傳へ得るものは呂昇の外にはあらざるべきが若しも呂昇にして直接大椽の弟子となりて親しく稽古を受けしならば或は他の弟子の如くに單に差向ひに格を授けらるゝに止まりて其の精髓は學び得ざりしやも計り難く恐らく直接教を受くるの機會なきが爲めに餘儀なく文樂座に通ひて間接の教を受けしもの偶然の幸ひとなりて大椽の大椽たる處を遺憾なく學び得しものなるべし果して然らば大椽の弟子とならざりしことは呂昇にとりては此上もなき僥倖にしてまた大椽も彼女を弟子とせざりしがために苦心慘憺の餘になりし其の語口の精髓を他に傳へ得たるものといふべし

其廿七

京都と神戸

京都と神戸とは大阪に近きため毎年四五回は興行し尙又慈善演藝會の如きものある時は多くは其の聘に應トて出演するを常とせり京都に於ては前に記せしが如き關係にて年來非常の人氣を有し居れるが神戸もまた之に劣らざるものあり中國よりの歸途同市に乗込み相生座に興行せし時の如きは非常の大入にて毎夜札止めの好況を呈し此時より一層の人氣を有して毎時の興行に大當りを見ざることなしといふ、また京都に於て雁次郎の一座を壓倒せしこもあり、それは最初呂昇の一座は京極の明治座において興行するの約束を以て入洛し同座にて興行を始めたるに偶々雁次郎の一座も京都にて興行することとなり仕打は共に同一の人なりしより雁次郎一座を明治座以下の劇場に入るゝを忍びずとなし俄かに呂昇一座を夷谷座に移す

こととしたり、此時呂昇は仕打の勝手なる處置を憤り一旦は其の儘中止して歸阪せんかと思ひしが斯くては如何にも雁次郎に面當をするが如くなりて藝人仲間的情誼において穩かならざるものあればとて遂に我を折りて素直に夷谷座に移ることを諾したるが勝氣なる氣性は之を無言のまゝに濟ますこと能はずいよゝゝ移轉のこと決定せしその當夜彼女は正装して舞臺に現はれ例の流暢なる辨舌を以て最とも懇慇に滿場に披露したりその時の口上に曰く

一座高席には御座りますれども御免を蒙りまして不調法なる口上を以て申上げ奉ります、さて御來臨の方々様ますく御清福にあらせられ目出度存ト奉り上げます、隨ひまして當都保美連の一座御當地御最負さまのお招きにあづかり未熟

なる妻共出勤仕りましてお耳を汚しましたる處初日以來わ
 けて今晚の如き雨天をもお厭ひなく斯く賑々しく御來場な
 り下され一座の者共身に餘る仕合せご存ト厚く御禮申上げ
 奉ります、就きましては當一座はまたく當明治座におきま
 して興行を續けまする筈のところ成駒屋の顔みせ芝居の都
 合にて當劇場明け渡しを命せられたるにつき一座の者
 共誠に残念には存トますれども弱きを押へ強きに従ふが今
 日の時世とやら申しますれば之も是非ない事と諦めまして
 屑よく明渡しをいたし、明晩よりは夷谷座におきまして向ふ
 五日間興行いたしますれば何卒お見すてなく御來場のほど
 を偏に希ひあげ奉ります
 此口上は非常の喝采を以て迎へられ別けて弱きを押へて強き

に従ふが今日の時世とやら申しますれば之も是非ない事と諦
 めまして屑よく明渡しを致します云々はいたく満場の同情を
 ひき其の翌夜夷谷座に移りてよりは人氣一入は加はりて殆ん
 ど此一座に集注し毎夜破れたばかりの大入りにて五日間の筈
 なりしもの更に七日間を延長したりといふなほ呂昇が右の口
 上を述べし時は仕打は棧敷の後方にありしが之を聞て座に堪
 はずエライ女たどの一語を残し苦笑しながら早々に逃げ出
 たりとの事にて仕打は今もなほあんなキマリの悪きことばな
 かりしと云ひ居るよし
 明治三十七年の正月興行として神戸に赴きし時始めて人形を
 入れたりが人形遣ひは吉田兵吉兵三、義助の一座にして此時
 は人形入りが一段の評判を加へ日頃倍するの盛況にて二十

日間興行しそれより京都に至り南座に於て同トく人形入りにて興行したり南座といへば京都第一流の劇場にして且つ京の花と稱せらるゝ祇園に在れば同座の客筋は常に一流の人々に限られ同座に観劇する女流の客は芝居を観にゆくよりは寧ろ衣裳を観せに行く方にて随つて見物人が場に充てる状を見物するも亦一興なりとて他地方より來りし旅客はわざと見物人を觀るが爲めに çık かくる位なれば此たびの興行の如き人形あるがために女客多く殊に祇園の藝舞妓装ひをこらしめて場内を飾り床の太夫も年若き美人揃ひなれば上下相映トて一入はの美觀を呈し淨瑠璃を聽くよりも此美觀を見るがために出かけるもの多かりし由にて二十五日間の長興行も大入り續きにて斯かる美的盛況は稀有のこととなりて京洛の人は常に噂し

あへりどぞ

一座は其の後再三人形入にて歌舞伎座その他に興行したりしが三十九年八月大阪御靈文樂座が暑中休場の際同一座の人形を入れて明治座に興行したり此時は文樂の人形が一段の呼物となりて一層の好況を呈し折柄天候不穩にして興行中は殆んど毎夜猛雨を見ざることもなかりしも二十日間の興行中一夜として聽客の場に溢れざることなく呂昇末虎を始め一座の太夫も頗る乗氣となり人形遣ひまた懸命に力を入れ同地の演藝界には稀に見るの好評を博したりと因に該興行中「京都新聞」に「呂昇の先代御殿」と題し批評を掲げたり左に抜載せん

呂昇の先代御殿は津太夫仕込との事なるがその後彼れは自から工夫研究して呂昇式のものとなし攝津大様をして呂昇

の政岡は天下の絶品なりと激賞せしむるに至りしはその十
八番物の中の最も上乘なる語物として知られ居るが一昨夜
恰もその語物といふにひかされて明治座に出かけぬ成程政
岡は之を語る本人が女性だけに男勝りの男性的氣概を有す
るうちにも涙多き女性の本性を失はず而かも飽くまて上品
にして貞女の位品と性格とを備へ泣いて泣かず泣かずに泣
く處何ともいへぬ味ひあり更に鶴喜代君と千松に至りては
無邪氣なる兒童の本質を遺憾なく發揮し兩兒の交も強請追
求て政岡を苦悶せしむるの状アリ〜と現出され満場を
て無限の悲感に打たれしむる處たしかに彼れの他の十八番
物に勝る處あるを感せしめぬ次を八汐の千松虐殺の慘劇に
至りては悪女の形相髪髻として眼前に顯はれ人をして知ら

ず識らず悪寒を感せしめたり最後のクドキは例の艶麗なる
聲に流暢明晰なる語調を以てし只わけもなく満場を嬉しが
らせ大椽以上の賞辞頻々として浴びせ掛けらるゝを見受
けたり因に呂昇は兩三年前まではその淨瑠璃の幅もあり貫
目もあり又老熟せる割合に舞臺の上に貫目を缺きしが近年
は年功のせいにか減切り貫目を加へ今は横から見ても豎から
見ても立派なる大一座の眞打なり尙又以前は動もすれば姿
勢を乱すの缺点ありしが今はそれも無く品位ますます加は
りて悠悠々迫らざるの態度更に一段の落付を加へたるが如く
に見受けられぬ

其廿八

三味線と語物と姿態

女太夫は以前は皆彈語りなりしが其の後舞臺を飾るために別

に三味線弾を加へ今日は彈語りの女太夫は寧ろ稀なる位なる
 が呂昇は始めより彈語りを改めざるの方針を執り今日も一座
 は皆彈語りにして随つて三味線の習練にも力を盡しつゝあり
 之は深き理由あるにあらず女は女らしく愛をもたざるべから
 ず別に三味線弾をつけるは舞臺は賑やかなるべきも彈語りの
 方女らしく見ゆるより割出せしものゝよしにて彼女は此方針
 をこめてより三味線の稽古にも最も身を入れ團平廣助(松葉屋)
 吉兵衛廣助(當今の等)は深く其の志を愛して熱心に教授したり
 といふされば彼女は三味線においても頗る造詣するところあ
 り専門の三味線弾すらその技の凡ならざるを嘆賞し居るとの
 事なり
 目下大隅太夫を彈きその手腕においては優に老大家を壓し夫

の東京の朝太夫を彈ける豊澤松太郎と共に當代の二人男と稱
 せられ居る鶴澤清六彼女の三味線を評して曰く呂昇は此道に
 かけても一種非凡の技を有し居りテンと下す一撥の音に何
 とも云へざる深へたる音色ありあの音色は眞似やうとて眞
 似得るものにあらず亦工夫や研究して出るものにあらず全く
 天品といふの外なし達者でもあり手も細かく動き三味線弾と
 しても既に立派なるものなるが此云ふにいはいはれぬ一撥の音は
 尙々十分發達の餘地を示すものにして此天品の腕を有するか
 らには習練の功たに積まば三味線にかけても適れの名手とな
 るべし云々と
 呂昇の音聲は單に綺麗にして艶あるのみならず甲乙の二聲揃
 ひ居りて幅もあり力もあれば何の種の語物にも融通し得ざる

にはあらざれども何れかと云へば艶物の方一層適當せるもの
 の如し本人も之を自覺せるにや得意の出し物としては多く艶
 物を撰び居れるが是等は皆攝津大椽の型を其の儘に習得し更
 に師の呂太夫には寺子屋吃又の如き物をまた津太夫には鰻谷
 を彌太夫には岩井風呂を住太夫には壺坂をこいふが如くは是
 等の大家の得意の語物を夫々各自について學びしより柄には
 まらざるべく思はるゝ物と雖も却々に聽くに足るものあり但
 し強いて上乘の語物を求むれば先づ先代御殿酒屋寺子屋堀川
 十種香紙治中將姫新口村合邦壺坂戀十鳴戸野崎忠九三代記三
 浦別れ等なるべし
 又容貌風采は勿論高座における姿勢態度行儀の如何が聽客の
 感情を動かすに至大の關係を有する事はいふまでもなき事な

るが一体淨瑠璃を語る太夫には以前より甚だ好まらざり
 惡習ありそは肩衣まで着けて威儀をつくろひながら淡をかみ
 痰を吐くの蠻行を敢てするの一事なりこの不行儀千萬にして
 又不作法極まる醜態は獨り男太夫において演ぜらるゝのみな
 らず女太夫の或者も時に之を敢てする事あり一たび見臺に向
 ひし以上は威儀を正し禮儀を重んじ苟めにも客に不快の感を
 與へざらん事を努むべき身が斯る野蠻極まる事を平氣にて行
 ふとは實に情なき次第にして嚴格にいへばさる醜態は素より
 のこと湯を呑み汗を拭くが如き不行儀をも避けざるべからざ
 るなり尙又中には只に姿勢を乱すのみならず見臺と扇子とを
 玩弄にして嫌な身振りやなれ故らに顔の相格を崩して殆んど
 芝居掛りの狂態を演ずるものあり此の如きは徒らに客に不快

の感を起さしむるのみにて客は聴くよりも第一見て居られぬ感を起し随つて淨瑠璃その物の價値を落すこと甚たしきものあるなり

呂昇は容貌もよく風采も揚がり見臺に向ひし肩衣姿先づは申分なくそれに落付もありて前に記せし作法の事の如き常に深く戒めて絶てざる醜態を演ずることなく強いて缺點を求むれば少しく體を動かすの一事にあれども之とて目に立つほどの事はなく是等の点においては優に多くの男女太夫の摸範とするに足るものあり之を要するに彼女の高座における容姿風采の美と品位ある態度と端正なる行儀とはその淨瑠璃に一段の價値と位とを加へしむるものなるべし

和歌山の「紀伊毎日新聞」に「豊竹呂昇」と題し彼女について記録せ

しものあり序ながら拔萃せんに曰く

(前畧)從來の藝人は總して品位を欠いで居る平素の行動において其の他において見識といふものがなく所謂最負筋の旦那なるものを無上に有難がりて宴席に招かれ幫間的の追從阿諛を以て能事となし藝を賣るのが本職かお座敷で幫間をするのが本職かわけがわからぬやうな有様である従つて世間からも輕蔑され一概に藝人として擯斥されて居る女太夫などには殊に此類の人が多いやうであるが獨り呂昇はこの陋態を蟬脱して居る彼女が今日至る處に名聲嘖々とし聲曲界の大立者として世間から許され多大の人氣を脊負つて立てるものは啻に伎倆が優れて居るのみではない高座における位品と見識とを高座を下りし處に於ても失はぬから世人

は自然に高潔なる同情を彼女に寄せるのである。女太夫が次第に其の位地を高め今日に於ては男太夫同様に世間から厚遇せらるゝに至りたるは畢竟呂昇が故照玉并に今同座せる末虎と共に女太夫の品位を高むる事を目的として都保美連なるものを組織し今も尙ほ此方針を變せず勇往邁進しつゝあるに依るので女太夫向上の位地を得し一事に至りては多くの女太夫は呂昇に負ふ處なかるべからずである。斯る次第であるから獨り呂昇のみならず一座の者は自然一個の見識を備へ、かの往々他の連中に見るが如き前受を專一とし場當りをするが如き醜態なく従つて聽く人をして一種高雅なる快感に打たれしむるのである。吾輩は尙ほ一座に向ひ今後とも此以上に品位を高め女太夫の位地を高めし動機となりし

が如く總ての藝人の模範となり彼等藝人社會の弊風矯正の先鋒とならん事を希望して已まぬのである

其廿九

呂昇の爲人と藝人の模範

呂昇は獨り藝術に優れ居るのみならず婦人として立派なる性格を有し居り、十一歳にして父を亡ひ爾來は女丈夫を以て聞えし母勇子の手に育てられしだけによく母の性質を受継ぎ聰明果斷にして男勝りを以て稱せられ居り、幼少の時はなかなかのお轉婆にて日常の遊戯も絶て女兒と共にする事なく常に男兒の群に交はりて小川に麥魚や鮒を漁り蜻蛉を追ひ蟬を捕へ竹馬にも乗れば木登りもなほ高擗の上に馬乗りとなりて腕白盛りの男の子を罵倒し掴み合ひの喧嘩をなす事も珍らじからず、また夏になれば小川に游泳を試みて溺れしことも屢は

ありて平素の所作において少しも女らしき處なく或時始めて
 締めし新調の帯を見事に切り割きて遊戯より歸りしことあり
 衣服を破り帯を割くなどは毎度のことながら母はその故を尋
 ねしに彼女は平氣にて今判官の切腹の芝居をして遊びたるが
 皆嘘の腹切をなすゆゑ妾は本當の腹切をして見せ此通り小刀
 にて切つてやりましたと答へ母をして呆れて叱ることも得せ
 しめざりしといふつい近所に彼女と同名の女兒あり同ト年輩
 なりしが附近の人はこの同名の兩女を區別するために彼女を
 呼ぶに男のお仲さんを以てし學校にても男のお仲さんが通り
 名なりしこそ斯る性質なるがゆゑ何事にも負けず嫌ひにて學
 校における競争者は皆男生にして随つて學事の成績も宜しく
 又遊藝を學ぶに及びても常に男子を相手に競争したりといふ

この男勝りの負けず嫌ひは成長の後もかはることなく勇往邁
 進は彼女の特長にして此氣概が今日の成功を得せしめたるも
 のなりまた幼少の頃より淡泊無慾にして利慾のために人と争
 ひし事なく今日都保美連の座長として一座を統率し居るも此
 利慾に無頓着なることが座員を悦服せしめ居るに與かりて力
 ありとのことなり尙又元來才智に富みたる女たけに常に求め
 て上流社會の紳士淑女に交際し自から品性を養ひ禮儀作法を
 修め多くの藝人に見るが如き鄙陋なる言行微塵もなく始めて
 彼女に接する人はいづれもその淡泊洒落のうちに高潔なる位
 品を備へ居るに意外の感をなし藝人にも此種の品格を有する
 者あるかとして嘆賞せざるものなく又仲間よりも藝人の模範と
 して尊敬せられ居るこいふ

彼女はまだ何かにつけ器用なる性質と見へ茶の湯挿花を始め裁縫の道も一通り辨へ殊に小學校以外に正式に學問上の教育を受けし事はなけれども相當の讀書力と理解力を有し文筆の技も亦拙からず卷首に掲げしものは編者の照會に對する彼女の答書なるが文章筆跡共に見るべきものありまたその家庭は實母の外一人の男兒と女兒ありしも夭折す養女とあり此頃の養女に養子を迎へ養女には普通の女子教育を授け實子と養子とは東京に遊學せしめ實子は商業學校に養子は法律學校に在學せりこの事なるが此兩人を東京に遊學せしむるに當り訓戒していふやう母は斯様なる無學な女の身ゆゑ何もお身達に教ふべき力なし只力の及ぶ限り學資は給すべければ世間より見下けられ居る藝人の腹から生れまた藝人に養はれたる子た

けに役に立たずと云はれぬたけの人間になつてくれとの事を以てし一介の女太夫の身を以て子女に高等の教育を授け居る事柄は彼等社會の傳へて美談となし居る處なりと序に記す呂昇は今日まで多くの弟子を養成しまた現に養成しつゝあれども本人が未だ三十三歳の師匠としては若年の方なれば弟子のうち大成したるものを出すに至らず今その一座のうち在りて四枚目の位置にある喜昇は聲も相應にあり又口捌きよく着實穩健の語口にして都保美連に居ればこそ四枚目の下位に据へられ居れども普通の女太夫一座に入らば伎倆貫目ともに立派なる眞打なり右昇は昇の兩人また將來に望みあり別けても右昇は其の聲に於て語り振りに於て頗る師の呂昇に似たる處あり習練次第にては呂昇の後繼者たるを得べしと

て深く望みを屬され居るといふ、尙又子供ながらも一座の眞となり目今東京に在りて多大の人氣を有し居れる昇之助昇菊の兩人は今日において多數の門弟中最も名をなせしものなるべく此他人氣をも有しまた伎倆優秀のものありしが廢業または死亡し他はいづれも初期の修業時代にありて未だ云ふに足らずこのことなり

其三十一

淨瑠璃に對する呂昇の希望

在神戸の友人華邨氏予の此書を編するを知り特に書を寄せ嘗て呂昇が淨瑠璃に對する希望として同氏に語りしものあり多少見るべきものあるが故に參考のためにとて左の一文を送り來れり至極道理ある希望にして又斯道に對する彼女の心掛を知るに足るべきを以て之を掲ぐ

華邨氏に語りし呂昇の談話

歌舞伎の方には近來學者先生方がいろ／＼ご力をお入れになりまして舊來の脚本に筆を入れられ卑猥なところを抜いたり慘酷なところを除いたりして時世に向くやうに改作をされ又は當時にはまるやうな新脚本をお作りになりましたやうで随つて段々改良されてまゐりますが淨瑠璃の方は一向冷淡に看過されて之を何とかしてやらうと思召して下さる方はないやうで御座いますこれは肝腎な太夫共が舊來の儘の頭腦で世につれて改良して行くといふ氣概がないからかも知れませんがか今少し淨瑠璃の方にも御配慮を願ひたいので御座います淨瑠璃の文章はなか／＼むつかしくて妾共はわけわからずに語つて居る處が澤山御座います又

床本にはてにをはなどの寫し誤りも澤山あるやうで御座い
 ますがこんな事は妾共には十分にわかりませんから是非貴
 下方の教へを受けねばなりませんから院本の出来た當
 時では普通の言葉であつたのが今日では廢つて居つて解り
 にくい事もありますし又御身分ある方の面前では大きな聲
 を語るを憚りますやうな如何はしひ露骨な文句もありません
 し更に人間界に有り得べからざる餘りに惨酷に餘りに突飛
 な事などもありまして是等は教育ある方の前では語るを遠
 慮いたすやうな次第で御座います尚又いつれの段物も長過
 ぎる嫌ひがありはせぬかと思ひます長いと兎角ダレルとこ
 ろがありまして之を聴かされるお客様は随分御退屈たらう
 と思ひますそんならと申して好い加減に抜きますと前後の

聯絡がとれなくなつて何が何たかわけのわからぬ物になつ
 て了ひます人形入りで御座いますれば此ダレルところも或
 は活きて面白く聴いていたくことが出来ませんが素淨瑠璃で
 はそんな譯にはまゐりません第一素淨瑠璃では解りにく
 御座います筋を知るに肝腎な文句のところも低く落ちて引
 張ります地合などになりましてちよと解り兼ねまして之が
 ために興味を感ずる上に大なる影響を來すやうな事もあり
 ます其處でどうか學者の方にお願ひ申し淫猥な文句は綺
 麗に直し餘りに惨酷に餘りに突飛な個所は修正し又面白
 くないところは删除して貰つて今少し短くして頂いたなら
 ば第一ダレルやうな事もなくなり又太夫も終りが崩れるや
 うな事がなくお客様も御退屈をなさらずに宜しからうと思

ひますかの多くの物語に御座います切腹にかけての懺悔物語殺されかけての長物語など第一理屈から申しても一命にかゝる程の重傷を負ひながらあんなに長物語りが出来る筈が御座いませんがあれなども只お客様に太夫の苦しむ容体を御覧に入れるのみでお聴きになつて左まで興味があらうとは思はれません斯んなことも何とか改めて頂きたう存トます、同トやうな物を續けて幾段も聴かされそれに眞ごなりますご全段を悉皆語りますからどんな物でも一時間内外はかゝりますし物によりては一時間半も掛りますすがそれも名人が語りますればそうでも御座いますまいが下手の長談議となりますとおお客様は随分御迷惑なものです、段々世が進んで時間が益貴重になりそれに教育が次第に進んでまゐります

すと在來の儘では聴て下さる方がなくなり此道も終には廢滅の外はありますまいと思ひます、以上は妾の希望で御座いますすが尙妾は平素妾共連中て研究会とでも申すやうなものでも組織し文學者にお願ひ申して淨瑠璃の講義を聴させめて盲ら語りをせぬだけの事を致したいと存トて居りますすが之もいろく事情が御座いますして未だ實行する事が出来ませぬ

其三十一 呂昇の談話

藝術に關する呂昇の談話は各地の新聞雜誌に記載されあるが其のうちの二三を左に抄録せん

稽古の肝腎なる事は申すまでもございませんが妾は始終師匠浮氣を致しますので仲間から常に狡猾たと申されます誰

にても夫々得意な語物が御座いますから其の得意なものを其の人について習ひましたそれゆゑ妾の淨瑠璃は語物に上りて皆師匠が違ひますが之は技藝を磨きます上には萬更わるい事ではあるまいと思ひまして今日もその通りやつて居ります——一番苦心して習ひましたのは日向島で御座います之は四年間苦心しまして漸く覺へることは覺へましたが師匠はまたく舞臺に出すのは早いもう四五年も自修してからたと申されましたのでついぞ語つたことは御座いませんでした先年東京にまゐりました時芝の琴平亭を席主から日向島はないかとの尋ねで御座いました妾はその時稽古はしましたかまた師匠から許されませんと申して断りました處がなかに東京から大阪まで聞えはしまいいそんを事に

遠慮は無用だから是非出してくれと云はれますと妾も實は四年間苦しんだものですから一度は語つてみたい氣が致しますので師匠には内所の積りで到頭語りましたところが幸にウケまして新聞にも賞められましたか其の時は誠に嬉しく御座いましたそれでその新聞の評が得心のまゐりますやうな評で御座いましたから夫を師匠に送つて四年間丹誠を以て下さつたお蔭が斯うで御座いますと云つてやらうかと思ひましたか思ひ直しますと師匠はまたく四五年先にと云はれたのですから何うせモノにはなつて居るまいと存トまして控へましたか夫から何處の席でも日向島を所望されまして何れも五六邊も語りましてほんの内所の積りのが公けになつて了ひました本郷の若竹亭で語りました時後で席

主にどうで御座いましたと聞きまじたら善く出来たが景清
 がちと若過るご申されまじた妾は成程と思ひ當りまじたが
 歸りがけに席主にちよいと持合せがないからお金を少し貸
 してもらひたいと頼みまじたら何にするかと問はれまじた
 其の晩席にまゐりがけ丁度年の市で御座いまして神田に如
 何にも立派な羽子板を買つて居りまじて欲しくて堪りませ
 んで歸りがけに買はうと思ふて居りまじたから其の事を申
 しまじると席主は羽子板が欲しいやうでは景清が若い筈だと
 いつて笑はれまじた——一度大阪の演舞場の共樂會で先代
 萩を語りまじた時新聞にケレンたとの評が出まじた妾は先
 代萩は津太夫さんに習ひまじて素より其の眞似も出来ませ
 んが教へてもろうた通りに語りまじたのですからケレン杯

ご云はれては師匠に對して濟みません一体何處がケレンか
 聞かして頂きたいと云うすれば師匠にこうくと云つて直し
 ますと別に理屈を云ふのではありませんかと申しまじたら
 之が話の種になりまじて呂太夫師匠から攝津大椽さんに話
 されまじて大椽さんの説明が御座いましてそれは以前より
 淨瑠璃には竹本派と豊竹派とがあつて竹本派は昔からの型
 通り地味に語り豊竹派はそれよりも派手に語つたもので互
 に一派をなして居つたそこで竹本派の人が豊竹流に語りま
 した豊竹派の人が竹本流に語るのを外連といつて居つた其の
 意味は外の連中の筋を語るといふことでこれは別に悪く云
 ふのではないあの人は外連も語れる器用な人たごいつて賞
 める事にも使つたので今日のケレンといふのは多分此外連

が訛つたのであらうと思はれるが何もそんな事に屈託せず
 に藝道を勵むがよいと申されまじた(後略)……(大阪毎日新聞掲載)
 (前略)松葉屋廣助さんは大變私を可愛がつて下さつて熱心に
 稽古をして下さいましたが常に女は女らしく愛を主とし無
 暗に太い聲を出すには及ばぬといつて誠めて下さいました
 これは如何にもそうだと存トまして弟子を教へるにも此方
 針をとつて居ります私共の幼少の時には寒稽古とか聲を破
 るとか申し女の先天的愛らしい細い聲を破つて所謂太棹に
 する事に勉めて居りましたが私はさう云ふ事には及ぶまい
 と存トまして今では一切聲を破る………太くすることには
 勉めませんで有の儘の優しい聲を出させる事にして居りま
 す教へるにも成るべく先づ趣味を吹込む事にしまして淨瑠

璃は面白いものだと云ふ趣味を與へれば自然に熱心になる
 と心得まして………名古屋の親戚に子供を持つて居る者が
 ありますが幼稚園に遣つたがドウも厭がる何故幼稚園を嫌
 ふかと思ふて調べた所が面白く遊ばすといふ事よりも先づ
 いろくいな事を教へる夫で子供が厭がるのたといふ咄を聞
 きまして成程之は一理ある弟子を教へるのは此の呼吸が大
 切たと思ひまして夫からは餘り干渉しないで居りますかと
 うも其の方が宜しいやうです(後略)………(大阪朝日新聞掲載)
 藝道に關する事など私共は彼是申す資格は御座いませんで
 又意見など何も御座いません御承知の攝津大塚さんあの方
 は藝に優れて居られるばかりでなく種々な事を調べられて
 先づ私共の社會の學者で御座いますから私共は常に手本と

致して居ります私の師匠の呂太夫さんも斯道には却々明るい人で御座いますから藝は勿論其の外にも種々教を受けて居ます、私は只今大阪に居ますが生れは名古屋で十九の歳まで同地の土佐太夫さんに就て教を受けましたが此人も淨瑠璃の事は餘程調べて居られますので只今も教を仰いで居ます、御承知でも御座いませうが名古屋は藝に凝る處で随分皮肉家も居ますから藝道に入る者は自然ほんやりしては居られませんが、——こんな事を申しますと生意氣なやうでございませぬが淨瑠璃の文章は女子供に聞かすにはナトむつかしく、支那の古事やら佛教の事やらそれ其の院本が出来た時代には普通の言葉であつたのが今日には廢つたものもありまして一寸解り兼ねます、之に節を附け引張るのですから本も

お讀みにならずして始めてお聞きになる時は随分解り悪からうと存トえず、そこで私は成たけ誰にも解るやうに語るのが淨瑠璃を語る秘訣だと思ひまして平素この心得を專一と致して居ります、興行元の方で「ピラ」の利く語物といふことを申します、之は太十とか壺坂とか多くのお客様に受の好い語物を申すので是等が何故「ピラ」が利くかと申しますとツマリ文章が平易に出来且つ何處でも能く語りますからお客様は度々繰返され始終の筋がよくお解りになつて居るから自然興を催されるのでございませう、さる方に太十や壺坂など寧ろ駄作で作としては價値の有るものではない、吉田屋とか新口村など佳作といふことを伺ひました、が成程吉田屋や新口村は少しも無理が無く自然その儘に出来て居ますやう

で佳作には相違御座いますまいが吉田屋なぞを出しまして
 もお客様に来て頂けません、これは誰も餘り語りませんが
 お客様の耳に慣れて居らず一度位お聞きになつても十分お
 解りにならぬからであらうと存トます、淨瑠璃に限りませ
 何でも解らねば面白く御座いません、人形入で御座いますと
 人形の方で能く説明して呉れますが素淨瑠璃ではそれがあ
 りませんから尙更此心得が必要と存トます、日向島を稽古し
 ます時にあの謠が如何しても出来ませんので謠曲の師匠の
 處に暫らく通ひましたたが其時に一層此感を深くしました謠
 曲といふものは私共には到底解らない趣味のないものと思
 うて居ましたたが些少なから其の道に入つて見ますとなか
 か趣味のある結構なものと思ひましたたが此趣味ある結構な

ものが其の道に入らぬ者には頓と趣味を以て迎へられませ
 ん是も畢竟あの節調では其原本に通トた者でなければ聞い
 た丈では解りませんから面白味を感じないのでせう、尤も淨
 瑠璃は謠曲ほど解り悪いことはありませんから謠曲と一所
 に申すは不穩當でありますやうがマア大体は同トやうな理か
 と存トまして一層解るやうに語るといふ心得を守つて居り
 ます………(岡山山陽新報掲載)

大阪と東京と高座の上につきましては、それは大阪の方が幾
 ら張合があつて語り可いか知れませんが、東京は艶な聲を容色
 が可ければ夫を呼物にして何かなしに眞打にして了ひます
 ので樂屋の人にも別に苦情を云はず先輩の人にも一向無神経な
 ものです、實際技藝を聞て遣うと思召すお客様は至つて妙な

いので語り可いたけに反つて私共は遣り憎いやうでござい
ます。絶句は時折遣りますので誠に困ります。昨年岡山へ
まゐりました折私が太功記の十日目で私の前が末虎さんの
油屋でございまして夫を聞いて高座に上つて語りますうち
「聲聞つけて駈出る操」といふべきところをツイ油屋に引込
れまして「駈出る貢」とキツパリ語つて了ひましたのでお客様
は大笑ひ私もハツト思ひましたけれどモウ奈何する事も出
来ず初菊諸共「こもいはずに其の儘語り流して了ひました
此失敗が甚く感へたと見えましてその後十日目が出ますと
いつも吃度其處で行詰ります。津太夫さんが日吉丸でほんに
あらゆる神様や佛様まで無理いふて「を髪結ふて」と佛様を還
俗させたり、また呂太夫さんが三日太平記を語つて「一室のう

ちに光秀が腹に突込む」といふべき所を「嘉平治が腹に突込む」
といつて反對に嘉平治を殺して了つたといふ噺を伺つた事
がございしますが猶且名人上手にも免れませぬものと見ま
す。他にも誰やらの絶句として覚えて居りますうちに忠臣藏
の九段目で「承塵」にかけたる長刀追取り」と間違へて直ぐ「之
ぞはいかぬと槍追取り」と語り直されたといふ即妙は丁度京
の三條また三條」と同様のなお噺で間違へても直ぐ恸ういふ
風にゆけば過ちの功名で反つて譽れを遺す譯でございませ
が逆も私どもには……それから書本と印刷本の區別で
ございますか。夫は書本は男さんが用ゐますもので女は猶且あ
の小形の木版になつた五行本を用ゐます事になつて居りま
した。或方が通常の五行本で語ると舞臺が小さく見ゆて縮

むと仰有いまた然う仰有ればそれに違ひはありませんの
 で唯今は女太夫でも書本を用ゐて居ります——體の備へは
 語物に依てそれく呼吸がございますから艶物や世話物を
 語ります時は自然いくらか乱れるのでございます、之は時代
 物を語りますやうに姿勢を嚴格にして居りましたは語られ
 もしませねば又情もうつりません、女を語ります時は些し
 は姿態を女らしくせねば寫りが悪うございます、尤も然うか
 と申して體から首まで振廻はしますのは不行儀になります
 から之は十分慎まねばならぬと思ひます(下略(大阪時事新報掲載))
 尙又呂昇の藝術に關する批評雜錄等も多くの新聞雜誌に掲載
 されあり、中には頗る見るべものありしやに記憶すればも一
 手許に保存せざりしため之を収録するに出なきが雜誌教育思

潮第四卷第三号に林田撫水氏「呂昇を聴く」と題し記録せしもの
 を見當りしにつぎ之を左に轉載する事となしぬ

某日田中夢虹眞下飛泉兩兄と共に呂昇の「三十三間堂平太郎」
 住家の段を夷谷座(京都)に聴きたりき、其翌々日再び行きぬ、近
 松作天の網島くぐれのこたつとしれては聞逃すことの出來
 ざりしが故に

余が初めて呂昇の「壺坂」を聞きて泣きしより以來逢はざりし
 こと殆んど三年如何ばかり汝の聲の慕はしかりけるよ、如何
 ばかり汝の詩の戀しかりけるよ、そのため口上さよ、聲に應
 じて、しづしづとあけし其顔を眺めては驚かざるを得ざりき、
 見ざること三年然れども三年に比しては餘りに老いたらず
 や、黒髪長くやさしき女性に生れ來たる汝藝術家の胸中には、

定めし逆境の波の繁くうちよせつらんと同情の涙を禁ト得ざりき
 悠然座して其膝をくづさず三筋の糸に手をあて、無情冷血の俗人共に詩を賣る彼女の姿を眺むるの時余は凡てのものを忘れたりき然れども天女の聲の如く空気の詩は絶えず我耳を動かせり、とばく泣きて湧き出づる涙に眼鏡を曇らすの時我友飛泉も同トくハンカチーフを兩眼にあてつゝありき、紙屋治兵衛は小春に迷ひたりき戀に迷ひたりき戀なればこそ迷なればこそ貞節の妻をも可愛の子をも父母をも兄弟をも世間をも生命をも然り生命をも捨てたりき治兵衛は戀に迷ひて戀に生きつゝありき兄の意氣なりし忠告妻の粹なりし仕打子の愛世間の義理是等を思ふの時彼は自己の罪な

りしを悟れり悟りつゝも猶彼は迷ひたりけり理性と感情との戦ひに彼は彼の胸をもやとぬ彼は偉大なる詩を歌ひつゝ人生の行路を歩みたり矛盾の現世に生き永らへることの苦さを思ふの時小春と手を携へて死の國に旅立ち趣味ある生涯を送るに、とらずと断定しぬ(中略)
 文豪近松門左衛門ペンを走らしてより芝居に人形に淨瑠璃に歌に永く傳へて彼等の魂を弔はしむ晨鐘の音や今如何に響きつらん彼等死の國にありて今如何に思ひつらん
 余は此淨瑠璃を聞きて藝術を評すべき眼をもたざるを悲めども涙を流すべき眼をもたしめし逝きし父と老いたる母に感謝す

呂昇は何處に生れたりしか彼女の母は彼女をして藝術家た

らしむべく彼女を生みしか彼女のかくなりし昔の歴史や如何に、末如何にかく思ふ毎に茫然自失すること久し、人の妻となりて家を守り夫を守るべく彼女は生れざりき、自然の妙音と五本の指の巧妙とは人の妻たらしむるべく餘りに偉大なりき、幸か不幸か、我は知らず、運命は彼女を導きて天才の行くが儘にまかせぬ、それ藝術は彼女の希望にして、彼女の生命は藝術に存せずや、涼しき眼と高き鼻黒き髪とやさしき姿これ等呂昇に對して何等の價値かある、彼女は口と手によりて生くるなり、然り口と手によりて生く、願はくは此言の客觀的ならざるを呂昇に望む

「天の網島」小なるもの、如くにして大なり、然り社會の一現象にして自然の一大歴史なり、整然たる戯曲にして偉大なる詩なり、シルレルもゲーテもセーキスピアも未だ嘗て浮はざりける感激を此所に近松は體現したりき、三讀四讀思はず机を打つて驚愕する事幾度や

然れども思へ呂昇は一の愛らしき口を以て、然り一枚の舌一寸の聲帯を以てして、此一大現象を語るにあらずや、複雑なる事情と幾種の人格とを明かに表現するにあらずや、唯に表現するのみにあらず美化と詩化して余輩の耳を奪ひ余輩の魂をして此一大歴史の中に逍遙遊せしむるにあらずや、彼一度泣けば聞くもの皆涙あり、彼一度怒れば聞くもの皆腕を握り、彼一度笑へば聞くもの皆倒る、しかも彼遂に詩中の人となるや、聞くもの皆眠れるが如く死せるが如く魂悉く天空に飛びて全然無我の境に入り國家あらず宇宙あらず唯一の神秘あ

ののみ藝術の力は實に此所にあり、是れ藝術の偉大なる所以
 にして、即ち亦呂昇の偉大なる所以にあらざるや
 更に思へ、口語ると共に五本の指絶えず三すぢの糸を離れざ
 ることを、糸語れるにあらざるか、口鳴るにあらざるか、巧妙人
 の如くにして神の如く然り
 世にも可憐なる小春治兵衛の如き二人のありける事よ、世に
 も卓絶せる近松の如き詩人のありける事よ、世にも羨ましき
 呂昇の如き藝術家のありつる事よ
 理性と感情肉と靈理想と現實之等理窟めいたる事を記さん
 と思ひたりしも、我に深き智識と天才のあらざるを如何せん、
 唯聞きたるのみ感とたるのみ、呂昇に釣られたるのみ、涙を流
 したるのみ、一言にして之を評せよと云ふ人あらば「素敵」なり

てふ以外の言葉を知らず、これ余輩のみの言にあらト、其翌日
 田中夢虹君が眞下飛泉兄に送りたる葉書中の一句に「嗚呼我
 友なる教育家諸君、淨瑠璃語り娘、義太夫然り、彼女は女學校を
 卒業せざりき、諸君の云ふが如く下等ならん、下品ならん、然れ
 ども思へ、諸君の教育と管理と訓練と能はざる俗人を集むる
 幾千人、能く熱血を以て教授と感動を以て訓練するに至つて
 は諸君或は恥ることなからんや、敢て問ふ諸君の思考とつゝ、
 ある常識とは何ぞ、眞理とは何ぞ、理想とは何ぞ、高尚とは何ぞ、
 俗とは何ぞ、天職とは何ぞ、粹なれよ、意氣なれよ、粹にして意氣
 なると同時に、樗牛氏の所謂「吾人は須らく現代を超越せざる
 べからず」の句を忘るゝ勿れ
 最後に附記す、前項に掲げし「淨瑠璃」に對する呂昇の希望の寄稿

者華村氏は淨瑠璃の嗜好者にして又熱心なる斯道の研究者なり予はその後更に書を以て氏に教示を仰ぎしに左の返書に接したり時既に全篇の印刷を終り格好の部面に挿入すること能はざるにより似合はしからざる標題の下ながらも茲に之を記載する事となしぬ

拜復御書面の趣き拜承仕候仰せに従ひ何がな材料となるべきもの提供いたしたき希望に候へども別にこれと申すもの思ひ出せず候につきせめて小生の呂昇嬢に對する所感の一端を申述べ候萬一にも御参考のはしとならば幸甚に候御承知の通り淨瑠璃は小生の平素最も趣味を感ずるものにして年來これを聴く事に浮身をやつしつゝある点に至りては敢て人後に落ちずと思ひ居る位に候小生が斯くも之に趣

味を有するに至りしは修學時代聊か文學に指を染むるに當り巢林子以下の院本を繙き漢文學極盛の時代に於て能くも斯る平民的文學としての佳作が出来たものかを感ずるに始まりしものにて爾來東京に在るの時も大阪に在るの日も將又當地に居るの今日においても常に淨瑠璃席に通ひて之を聴くを唯一の娛樂と致居り候然るに小生は之を語る太夫に對し常に頗る不平なき能はず候ソハ折角の名文佳作を悉く名文佳作と云はず中には甚たしき駄作悪文あれどもわかるやうに語り顯はさざるが爲めに候此名文佳作を活かして語ると殺して語るさは太夫其人の伎倆にあるものにして是は別問題とし兎も角もこれを何人にも解るやうに語り得るものは百人に一人は無いと云つて宜しからんと存ト候小生の

如き好きなき者なればこそ之を聴かんとする場合には其前に
 一通り原本を繙讀いたし候が夫でも言々句々わかるやうに
 聴かして貰ふことは出来ず候原本も讀みしことなく筋も聞
 きし事なき人には恐らくサワリの一節か言葉になつての一
 部分の外は解るまじと思はれ候否を必ずわからぬに相違な
 く候多くの太夫が斯くも解らぬ語り方をなすにも拘はらず
 尙且つ客を招び得るは客が畢竟同ト物を屢ば聞きて稍や之
 に通ずるに至り又は芝居や講談などにて大体の筋を知り居
 るがため多少の興味を感ずるものに候
 此の如く多数の太夫が之をわかるやうに語り得ざるは淨瑠
 璃其物の節附けが悪しき乎又は太夫其人にその伎倆なき乎
 是は問題と存ト候が小生の見る所を以てすれば罪は節附け

にあらず全く太夫にあると存ト候何となれば何人にも明瞭
 に解るやうに語り得る太夫があるを以て候小生が東西各
 地において今日まで聴きし太夫は數へ難きほどなるが此名
 文佳作をわかるやうに語り得るもの即ち小生の理想にかな
 ふ太夫は故綾瀨太夫と攝津大椽と大隅太夫と今貴兄の筆に
 上らんとする豊竹呂昇の外には是なしと信ト候
 津太夫彌太夫呂太夫住太夫などの老大家も其以下の賣出し
 の若手連も小生は屢ば聴き今も現に聴きつゝあるが成程是
 等の老大家は流石は一部分の情を語るの点においては頗る
 巧妙なるものあるも所謂難聲であつたり節廻はしが不器用
 であつたりして本を讀みつゝ聴くにあらざれば明白にはわ
 からず候されば是等の人々は大家は大家なるべきも一部の

黒人の間における大家にして之を聴て娛樂を得んとする多
 數の素人にこりては平々凡々の太夫に外ならず候
 攝津大椽は格外に候が大隅太夫は寧ろ難聲ながらも能くわ
 かるやうに語り又呂昇は女流なるがために黒人がる人より
 多少重きを置かれざるが如き傾きあれども實際における伎
 倆は實に非凡なるものはあり候彼れの語口は如何にも綺麗
 にして垢抜けもし又灰汁もとれ如何なる複雑せる場面にて
 も明晰にわかるのみならず聲もあり語ることも巧みなるが
 ゆゑそんな長丁場と雖もダレを感ずることなく面白く聴き
 なされ候

呂昇はこの流麗にして且つ明晰なる語口を以て聴く人をナ
 ヤームするのみならず風采の美と姿勢の端嚴さが更に聴く

者をナヤームするものは是あり候攝津大椽はたしかに斯道の
 名人に候が大椽の名人たる所以は要するに其語口が何人に
 もよく解り徹底的の感興を與ふるが爲めに候一部分の情を
 語るの伎倆に至りては大椽以上の者あれども前いふ如く全
 段を透徹せしむる事能はざるがため結局平々凡々を以て終
 るものと存せられ候

大椽は艶麗暢達なる所謂大椽式の語口を以て斯界を風靡し
 大隅は堅實穩健なる語口を以て一方に覇を唱へ呂昇は前二
 者に對し獨得として標榜するものはなけれども大椽式の一
 層優艶なるものとして大椽大隅と共に現代における斯界の
 三名人を以て稱するに足ると存ト候殊に彼れの子役の聲に
 至りては他に眞似手なき天下の絶品と思はれ候要するに彼

れが今日の伎倆を發揮するに至りしは修練の効によるは勿論なるべきも全くは天品と申すより外これなくと存候終りに臨み一言加筆いたし候小生は藝人に向つて人格を論ずるの愚をなさず候へども特に此處に貴意を得たき事これあり候ソハ呂昇の藝人氣質を脱し居るの一事にして同時に彼れは人格を以て論ト得るの資格ありとなすの一事に候今日の藝人は多く無教育にして随つて自己の技藝に天狗なるの外定見もなく見識もなく人格に於ては全くのゼロに候れも其の筈彼等の交際範圍はお互に教育の素養なき儕輩の間に限られ又彼等が平素最負筋の旦那として崇敬つゝあるは之も人格を以て論トがたき相場師か遊廓業者にして只さへ人格なき彼等は更に是等の旦那なる人に依りて一層其

人格を落さしめらるゝもの候然るに呂昇は藝人はその習得せる藝術を賣るものにして一個の立派なる藝術家なり今日藝人が他の藝術家より區別せられその稱呼も藝術家を以てせられずして輕蔑の意味を含める藝人を以てせらるゝは多くの藝人が我から墮落しその品格を保ち得ざるが爲めなりさて居常此事に注意し人格を高むる事に努め居る事は疾くに御承知のことなるべく此一事は頗る賞揚するの價值ありと存候また過日申上げ候彼れの淨瑠璃に對する理想の如きも大に見るべきものありと思考いたし候早々呂昇が今日までの經歷において將又その藝術において以上の外なほ記すべきこと尠なからざれども其の大要は略は盡し得

たりと信ずるを以て今はこれにて筆を擱き他日機を見てその
缺を補ふことゝすべし

義太夫の花 豊竹呂昇終

明治三十九年十一月廿五日印刷
明治三十九年十一月三十日發行

義太夫の花 豊竹呂昇

定價四拾錢

編者 長 博 景

發行者 名古屋市富澤町二丁目十番地 鈴木 木 錫 吉

印刷者 名古屋市禰宜町甲百二十六番戸 金森 辰 五 郎

印刷所 名古屋市禰宜町甲百二十六番戸 新愛知分工所

名古屋市富澤町二丁目十番地

發行所 中 京 堂

不許 複製

卸小賣
富名古屋
澤町
中京堂

雜誌
新刊書籍
工八力キ

印刷部
活版
石版
銅版
印刷

鐵工部
印刷機械一式
其他諸機械
製造販賣

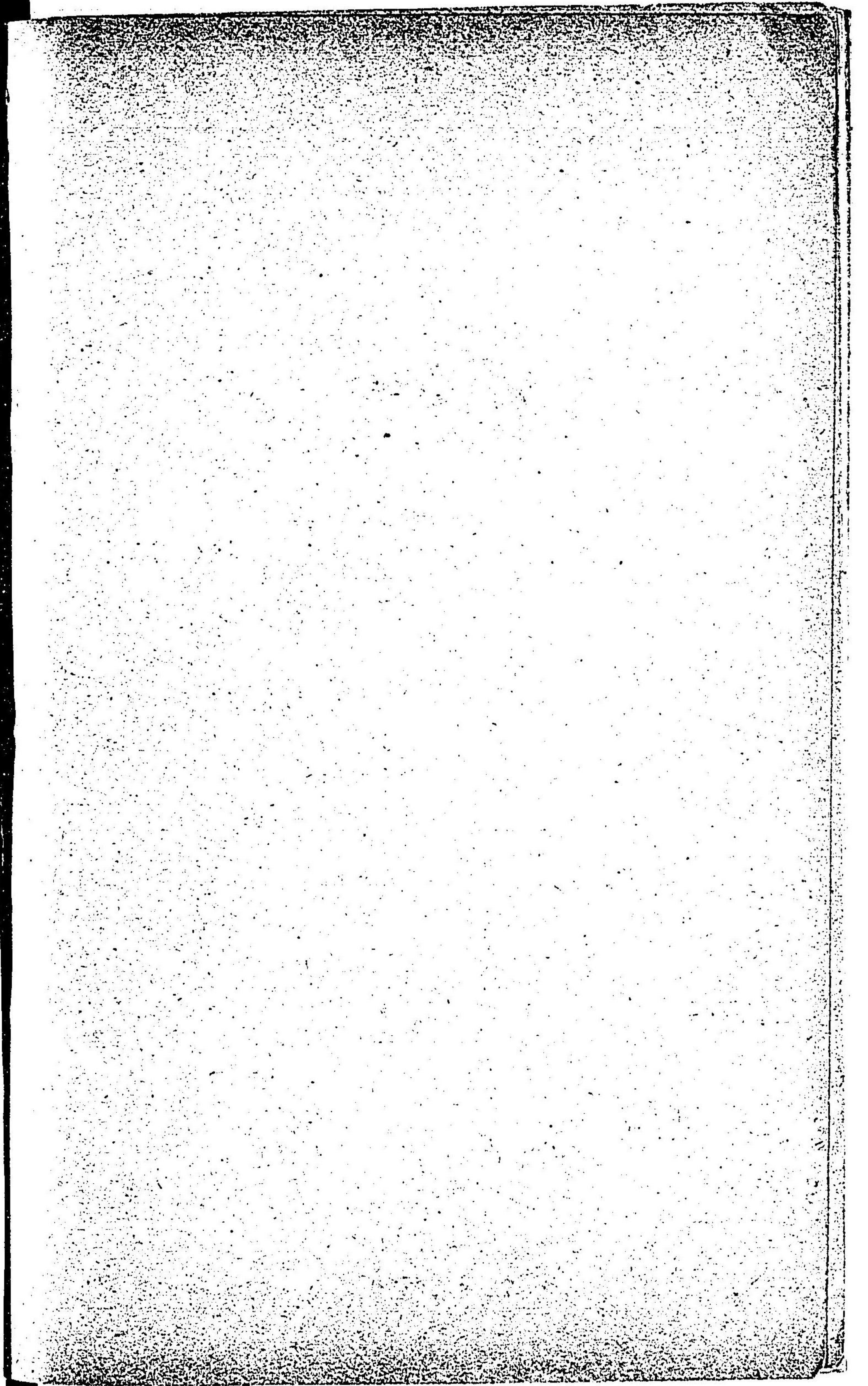
營業所

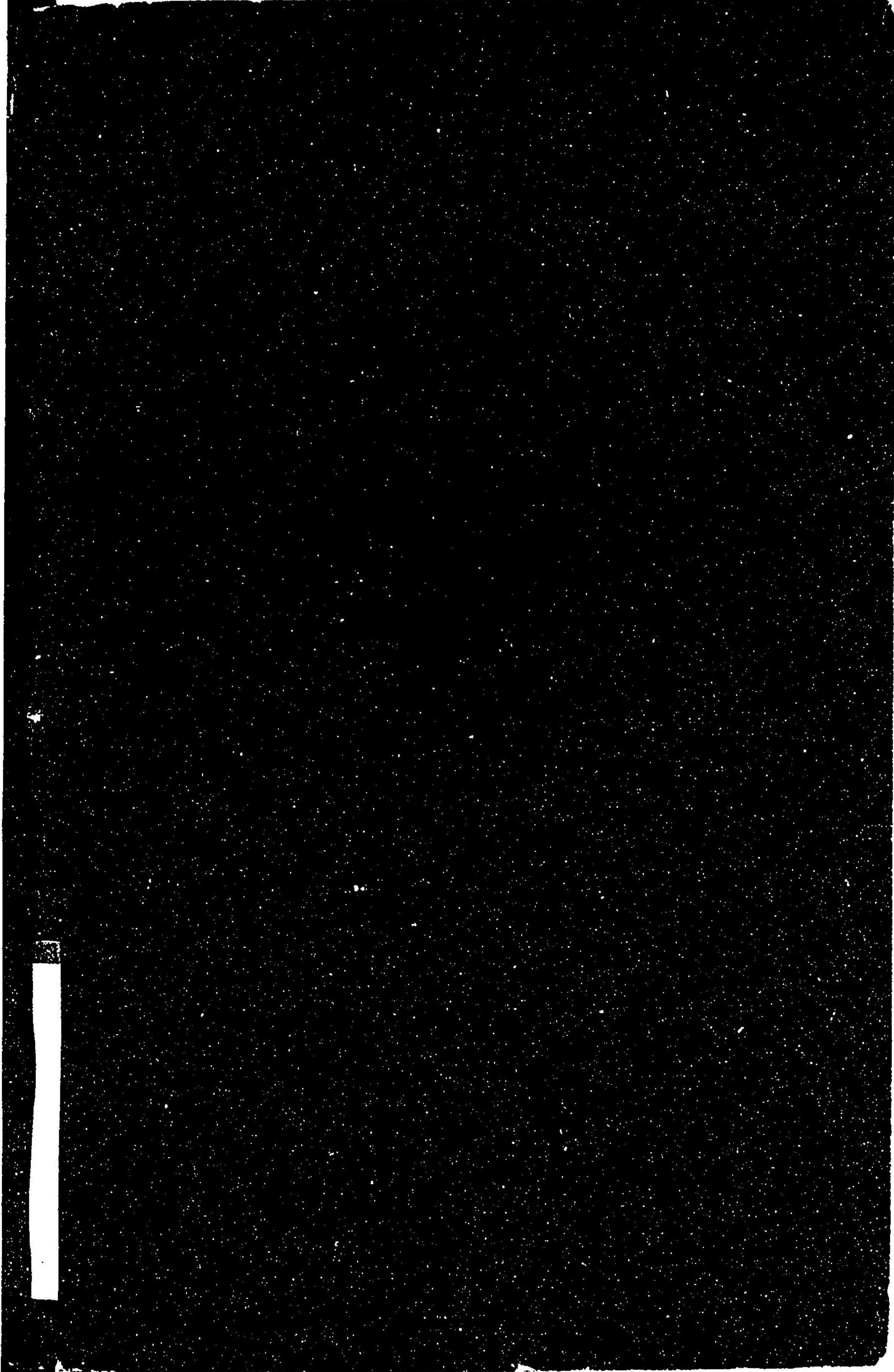
名古屋市禰宜町

金森

辰五郎

(電話八八二番)





A small, vertical white rectangular mark or label is located on the left edge of the dark textured area.